

JICA 海外協力隊向け実践ガイド

CROSSROADS

AUGUST

2023

クロスロード

8



特集

“職種”を生かして
日本で活躍する



2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 SPECIAL INTERVIEW

第1回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰 大賞

特集

6 “職種”を生かして日本で活躍する

14 派遣国の横顔 メキシコ

～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

21 いま、読みたい電子書籍

22 専門家に聞きました！

失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

24 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

26 ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

28 先輩隊員のシューカツ記

30 派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 あの日、地球の、あの場所で。

35 隊員めし 任地の食生活に彩りを！

36 公開！私の派遣国生活



表紙よせて

ヨルダンのナショナルチームのメンバーと昨年撮った一枚です。引退して別の進路へ進んだ人もいますが、昨年の世界水泳大会でヨルダン人初の準決勝進出を果たした人もいて、教え子の成長にやりがいを感じます。スポーツを通じて笑顔が生まれることが平和の実践だという信念の下、残りの任期を全うしたいと思います。福山 傑さん(ヨルダン/水泳/2021年度2次隊・広島県出身)

■国別索引	掲載ページ
インドネシア	23
ガーナ	24
キルギス	2, 18
ジブチ	26
タンザニア	10
ネパール	8
パナマ	8, 34
パラグアイ	30
フィリピン	4, 6
ホンジュラス	24
マレーシア	36
ミクロネシア	8
メキシコ	16, 17, 18, 19
モロッコ	35
モンゴル	28
ラオス	21, 34
ルーマニア	12
ヨルダン	1

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	34
村落開発普及員	23
養殖	34
輸出振興	18
品質管理・生産性向上	18
青少年活動	12, 30
水泳	1
バドミントン	19
バレーボール	28
数学教育	24
体育	17
小学校教諭	6
小学校教育	26
電子工学	21
デザイン	2, 4
料理	10, 35
看護師	8
助産師	16
基礎保健	8
障害児・者支援	36

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	18, 21, 26
山形県	17
福島県	16
栃木県	19
千葉県	8, 24
東京都	24, 34
神奈川県	30
福井県	28
三重県	6, 35
京都府	4, 12
大阪府	23, 36
兵庫県	2, 10
広島県	1

【凡例】 JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協力子(ケニア/環境教育/2019年度1次隊)	氏名	派遣国	職種	隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局



自分で描いたデッサンを手にする広告デザインコースの生徒たちとビーバースさん(右端)

「再起」展に向け12人のアーティストグループ「On Ekij」に、「再起」に加え「キルギス」をテーマに依頼。アーティストが全体のイメージを決め、生徒たちは指導を受けながら細部の描き込みを担当している

子どもたちに伝えたいSDGs

世界の学校

プロのアーティストと生徒がコラボレーション 国立歴史博物館での展覧会「再起」展を準備中

ビーバース 侑さん(キルギス/デザイン/2021年度2次隊・兵庫県出身)

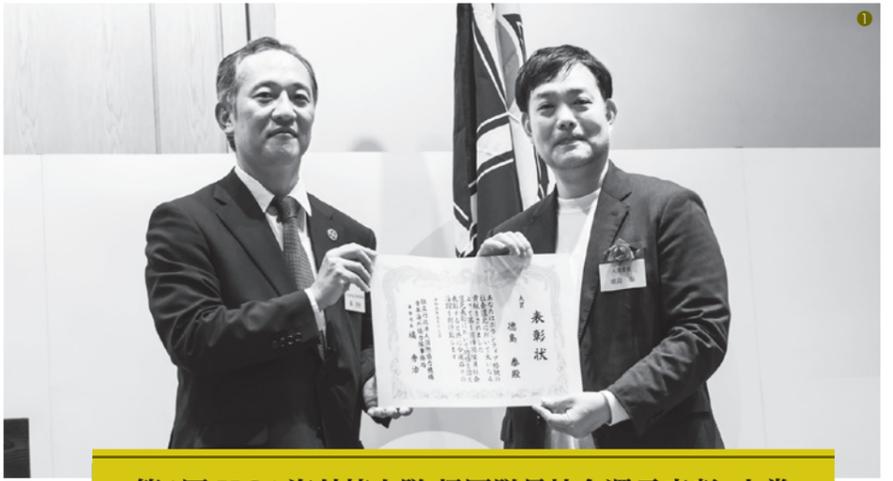
職業訓練校の広告デザインコースで16〜19歳の生徒にデザインソフトの操作方法や手書きデッサンなどを教えています。授業は先生が教科書に書かれたデザインの理論を読み上げるという方法で行っていましたが、生徒たちは聞くだけの授業に興味を持っていない様子でした。

そこで、私は授業に実技を取り入れ、生徒一人ひとりに対して指導するようになりました。例えばCDのジャケットをテーマにして、好きな歌手のアルバムデザインを考え、実際に描くといった作業をします。また、靴下メーカーに協力してもらい、靴下のデザインを生徒が考えて、メーカーが商品化する、という取り組みも行いました。生徒たちは張り切ってデザインを考えていました。

生徒たちには、デザインに限定せず広くクリエイティブな作品作りに触れてほしいと思い、キルギスのプロのアーティストたちに呼びかけ、20人以上のアーティストと生徒たちが共に創作するという取り組みを行っています。作品は、8月6日からキルギス国立歴史博物館で開催する展覧会で展示します。テーマは、世界でさまざまな問題が起こっている中にあるけれども、希望が感じられるように、「再起」としました。

展覧会の準備を通じ、生徒の中には、毎日学校に来る、先生の言ったことをきちんとやるなど、明らかに変わった子もいます。アーティストが「再起」をどう解釈し、作品を作っていくのか、自ら発想するのが苦手な生徒たちに、その過程を体験してほしいと思います。

展覧会の一部では、平和について考えてほしいという思いで、原爆に関する作品の展示もあります。広島県出身のJICAキルギス事務所の川本寛之所長が大学院で研究している内容を反映させた作品をアーティストが制作し、生徒がその手伝いをしています。



第1回 JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰 大賞

●5月13日にJICA市ヶ谷ビル国際会議場にて行われたJICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰表彰式で。左は橋 秀治青年海外協力隊事務局長 ●自社開発による義足製造に特化した3Dプリンター。素材に安価な樹脂素材を使い、低コストを実現した ●インスタリムの義足。下腿用・上腿用のほか、カバーがついたもの、軽運動用など、さまざまなタイプの義肢器具を製造販売している ●研究開発拠点となる東京オフィス。フィリピン、インドにも拠点を置き、義足の普及率を加速させている

SPECIAL INTERVIEW

インスタリム株式会社 徳島泰さん（フィリピン/デザイン/2012年度1次隊・京都府出身）

世界が注目する3D義足 活動の転機は、任地を 襲った災害への支援活動

協力隊経験者の社会還元を高め、より良い社会を目指すことを目的に、今年度から始まった「JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰」。国内外問わず社会課題の解決に取り組む、帰国後10年以内の協力隊OVから選ばれる。4月20日に第1回の受賞者8人が決定。今回は大賞を受賞した徳島泰さんにお話を伺った。

「必要とするすべての人が義肢器具を手に入れられる世界」——それを目指すのは、徳島泰さん率いるインスタリム株式会社だ。

オリジナルの3Dプリンターと義足設計用ソフトウェアを自社開発し、高額な設備や高度なスキルを必要とせずにユーザーに合った義足の製作を可能にした。コストは従来の約10分の1の約4万円、納期も最短1日と大幅に短縮。「義足がないことで社会参加が阻まれている世界中の人々を救う」というインパクトの大きさと独創性が評価され、第1回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰の大賞受賞となった。大賞は募集時には

未設定だったが、新設。相応しい事例と審査委員が満場一致で決めた。

「隊員時代にお世話になった企画調査員（ボランティア事業）の矢野史俊さんから賞についてお聞きし、推薦していただいていた応募しました。大賞と知って驚きましたが、何よりも家族が喜んでくれたのが嬉しく、誇らしい気持ちです」と徳島さん。起業の原点は、協力隊で活動していたフィリピンのボホール島にあると振り返った。ベンチャー企業での技術開発、Webデザイナー兼システムエンジニア、医療機器メーカーの工業デザイナーなどを経て、徳島さんが協力隊に参加したのは34歳の時だ。要請はボ

して死んでいくしかない人たちが大勢いたのです」

これはフィリピンだけの問題ではない。今後先進国になっても途上国も同じ問題に直面するのが目に見えていた。「この社会問題を現地人の目線に立つて理解している人中で、義足作りに必要なハードウェアやソフトウェアの知識、医療機器の知識、経営のスキル、すべてを持っているのは世界中で自分しかないのかもしれない。ならば自分がやるしかないと思いました」。

14年の帰国後、慶應義塾大学大学院に進学。非常勤研究員として3Dプリンターを駆使した義足の開発を進め、17年3月にインスタリムを立ち上げた（18年、株式会社組織変更）。「義足開発のための甚大な開発費を捻出するために思いついたのが、スタートアップです。上場を目指すのは、途上国ファーストで事業を行う日本のもので、ぐくりスタートアップとして

「我々の島を助けるために動いてくれた泰のために」
現地の信頼を得て、活動が本格化

ところが、順調に進み始めていた矢先の13年10月、M7.2の直下型地震がボホール島を襲う。

「島中の建物が倒壊し、多数の死傷者や避難民が出て、終わった、と思いました。当然、プロジェクトも頓挫するだろうと半分諦めました」

本来の活動ができなくなったが、徳島さんはすぐに目の前で困っている人のために動きだした。毎日島中を巡り、どこでどれだけの人が困っているのか、どれほど救援物資が足りないのか、各地の状況とニーズを把握し、写真と共にJICAフィリピン事務所に報告し続けたのだ。

「たとえ活動が頓挫しても、今やれることをやろうと思えました」

そのかいもあって、ボホール島に緊急の成功例をつくるため、そしてスピーディーな世界展開を実現するためです」

22年には、人口が14億人を超え、糖尿病患者数の多いインドに進出。ユーザーは通算10000人を超えた。今年4月から6月にかけては、ウクライナ紛争被害者に義足を届けるクラウドファンディングも行った。

強い志を持って突き進む徳島さんが今、後輩たちに伝えたいのは、簡単に諦めないでほしいということだ。「帰国して5年目、起業からだ2年目にあたる19年に、初めて義足の販売ができました。その後もコロナ禍の影響を受けたり、資金調達に苦労したり、もし当時に戻ったら同じ決断はしないだろうと思うくらいハードでした。でも、途中で諦めたらすべてが失敗になってしまう。諦めなければいつか成功するはず。現地や社会のためと信じたことは簡単に諦めず、トライ＆エラーを繰り返してほしいです」

徳島さんは義足の潜在ニーズに気づき、任期中に試作第1号を製作した。詳しく調査すると、フィリピンでは最大で約100人に1人、糖尿病による血管障害や神経障害で足が壊疽しているらしい、ということがわかった。「貧困のために安価な炭水化物（糖質）を食べるしかなく、糖尿病を罹患して足を腐らせてしまう。足を切断したところで義足が買えなければ仕事ができない。結局、家族の厄介者と



Yutaka Tokushima
1978年生まれ、京都府出身。液晶部品のハードウェアベンチャーに入社後、25歳でウェブシステムとハードウェアを開発する会社を起業。その後、多摩美術大学を経て、大手医療機器メーカーの工業デザイナーに。2012年から協力隊に参加。帰国後、慶應義塾大学大学院に進学し、17年にインスタリムを設立。18年4月に株式会社化し、代表取締役CEOに就任。



フィリピンでの協力隊活動の様子



寺子屋に通う子どもたち。「先生が一方向的に何かを教えるのではなく、共に学び合う場所づくりを心がけています」(堤さん)



つづみ まひと
堤 真人さん
フィリピン/小学校教諭/
2006年度3次隊・三重県出身

大仙寺副住職。横浜国立大学大学院の教育学研究科を修了後、フィリピンで協力隊員として2年間活動する。帰国後、大阪市や横浜市の小学校教員として11年間勤務し、研究主任や横浜市カリキュラムマネジメント策定委員などを経験。2020年4月、退職して故郷の三重県伊賀市へ戻り、同年8月に小中学生向けの寺子屋を開設した。JICA三重デスクも担当。

“職種”を生かして 日本で活躍する



職種：小学校教諭



寺子屋運営

教える先生から、 寺子屋で共に学ぶ仲間へ



協力隊OVの友人や、その知人のウクライナ人を招いた特別ワークショップ

「協力隊時代のすべてが原体験となつて今に生きています」と話すのは、三重県伊賀市にある大仙寺の副住職、堤真人さん。11年間の小学校教員生活にピリオドを打って実家のお寺へ戻り、放課後の学びの場・寺子屋大仙寺を開いて4年目になる。

学びの柱は、子どもたちがみんな決めて目標を達成するために話し合い、役割分担して実行するプロジェクト学習だ。誰かにやらされるのではなく、自らが主役になることを大切に、子ども食堂を運営したり、緑日の出店や募金などのボランティア

活動にも取り組んでいる。大学と大学院で教育学を学んだが、学校を出たばかりの自分が子どもたちに何を教えられるのか疑問もあり、2007年、協力隊に新卒参加した。任地はフィリピンのボホール島の教育委員会で、教員の授業力向

上プロジェクトの推進を任せられた。堤さんは島にある17校ほどの小学校を巡回し、精力的に模擬授業や研修講座を企画したが、半年が過ぎた頃、現地の先生たちがよそよそしくなつた。話しかけても返事すらない。戸惑う堤さんに先生の一人がこう言った。「日本から来て偉そうにするおまえのことなんか誰も好きじゃない。だいたいなぜ英語を話すんだ？ 現地の言葉を覚えるよ」。

人」として生きようと決めた。「みんなも心を開いてくれ、一緒に授業づくりを進めていけました。何より、支援者と被支援者は常に相互関係であることを学んだのです」帰国後は大阪府の臨時的任用教員を経て、学生時代を過ごした横浜市を経て、学生時代となった。「学校では協力隊時代の経験を生かし、自分が生徒に教えるスタイルではなく、先生と生徒が同じ作業をし、時には生徒同士が教え合うような教室づくりを実践していました」

切った。次は、放課後を楽しく過ごせる場所をつくらう」と20年3月に小学校を退職して帰郷。その5カ月後、安価で通える寺子屋を開いた。現在は、小学生45人と中学生20人が週1〜2日の頻度で通ってくる。小学生に対しては学び・遊び・友達づくりに重点を置き、中学生には将来も見据えて受験勉強を行う。「地方から都市圏へ進学するには費用が非常にかかるので、低料金の塾としての役割も果たしています」。さまざま分野で活躍する大人を招いて、話を聞く機会も設けている。

「子どもが自ら育つ環境をつくるのが自分のミッションで、私も共に学んで育つ学習者だと思っています」22年からはJICA三重デスクとしても活動する堤さん。伊賀市は人口の約7%を外国籍の住民が占めるが、経済的に学習機会の少ない家庭も多く、寺子屋へ通うことも難しい場合がある。将来的には奨学金制度を作り、外国籍の子どもたちが気軽に通えるようにしたいと考えている。「いずれは多文化共生社会を推進する民間の拠点となり、地域に暮らす外国人が、日本に来てよかった」と思える機会を増やしたいです。日本人の子どもたちには、自分の暮らす地域で異文化に触れ、外にはもっと広い世界があると感じながら成長してほしいと思います」

「学校教育の中でやれることはやはり一区切りついた時期でもあった。『学校教育の中でやれることはやはり」

寺子屋を運営するには

堤さんの場合、2020年6月から、まずは休日に「お寺で遊ぼう」と題して子どもたちが参加できる催しを開始。8月に行った4日間の「夏の寺子屋」などを経て、本格的に平日の運営に移り、徐々に規模を拡大してきた。

現在、月謝制で小学部は週3日、中学部は週1日。タイムスケジュールを設けて授業を実施している。

※授業イメージ例 (小学部)

授業前 16:00-17:00	来た子が自由に遊べるように寺子屋・境内を開放
サークルタイム 17:00-17:15	読み聞かせや遊びなどのアクティビティの時間
マイタイム 17:15-18:05	一人ひとり何を勉強するか相談し、プリントや宿題をする
おやつタイム	
プロジェクト 18:10-18:40	アート、言葉、お祭りなど月替わりの活動を行う



天気の良い日には島一周ドライブを行ったりと、外へ出てもらえるようにさまざまな取り組みを講じている

職種：看護師



高齢者支援

島のお年寄りと一緒に 元気に100歳まで過ごしたい

鹿児島県のトカラ列島、十島村^{としま}住民課の介護補助員として働く宮井美津子さん。看護師としてキャリアを重ねた後、60歳を前にシニア海外ボランティア（以下、SV）に応募、3度の派遣を通じて、途上国で看護技術を伝えた。その後、看護の経験を生かし、「日本の高齢化が進む地域で、お年寄りや元気に100歳まで過ごしたい」と地域おこし協力隊として同村に赴任し、介護を通じてコミュニティを支えている。

看護学校卒業後に病院に就職し、働き続けた宮井さん。「趣味が勉強」というとおり、仕事を続けながら、大学、大学院で学びを重ねた。

看護部長も経験した宮井さんの転機は、電車で見た協力隊募集のめぐり広告だった。見た途端、「これだ」と思ったという。自分の経験を生かすことで、社会への「恩返し」にもなるとSVに応募した。

2008年、最初に派遣されたの

は、ネパールだった。同国唯一の医学部、トリブバン大学医学部の看護学科で、「看護の理論と実践」について教えた。仕事に腰を痛める看護師が多かったことから、腰痛の防止やストレス対処など安全な仕事の仕方も伝えた。

看護学校では自立を目指す女性が多く学んでいた。もともと、そうした人たちの力になりたいと思いつつながら帰国した直後、新たな看護師職種の募集を知って応募。今度は、バヌアツ看護学校で実習などを担当することになった。東日本大震災の直後の派遣で、バヌアツの人たちはみんな震災のことを知っていて、日本から来た宮井さんを歓迎してくれた。災害看護について、災害とは何か、看護師に何ができるかということを経験者たちと一緒に話し合った。

バヌアツから帰国し、3度目の派遣で程なくマイクロネシアに派遣された。マイクロネシア短期大学の看護ア

シスタムで基礎看護を担当し、「看護技術とコミュニケーション」や「専門職の質と態度」を教えた。

マイクロネシアから帰国した後も、SVとしてさらに活動したい気持ちがあったが、応募には69歳という年齢制限があり、諦めた。「『生涯現役』で社会の役に立ちたい」と考えていたところ、十島村で看護師経験のある人を地域おこし協力隊として募集していることを知った。

同村は、五つの無人島を含む12の島から成る。宮井さんが滞在する島は人口約80人。都市部の小中学生の離島留学やシングルマザーの移住などを積極的に受け入れているが、高齢化は止まらず、元々島で暮らしてきた人たちは65歳以上の人が約35%に及ぶ。村は島の診療所で看護師2名の体制を目指しており、医療と介護の連携と支援体制のため、宮井さんは高齢者の介護予防に取り組むことになった。

日々の活動は、午前中の家庭訪問・見守りから始まる。毎日8軒ほどを回り、「お食事、食べた？」などの何げない会話をしながら、変わりないかどうかや困り事を確認する。

「健康以外に、時計の電池交換や、携帯電話が通じないという相談を受けるなど、電化製品に関する相談も多いです。鍋を焦がして困っている人もいます」

「これ、何が書いてあるか読んでください」と郵便物や役所からの文書を渡されることも多い。視力が衰えている人だけでなく、生活に追われ、学校に通えなかった人もいます。宮井さんは「これは、こういうお知らせですよ」と説明する。午後はコミュニティセンターで、デイケアに集まった島の人たちと共にゲームや工作をして過ごす。認知症の症状がある人や

歩くのが難しくなり、送り迎えが必要な人もいます。だが、「動かなくなる

と、さらに動けなくなる。動くのが一番のリハビリであり、介護予防」と、宮井さんはできるだけセンターに来るように呼び掛ける。

センターには温泉があり、週3回入浴して帰宅する。楽しみな時間である一方、風呂は高齢者の事故が多い場所でもあるため、事故が起こらないよう気を配り、入浴介助もする。宮井さんが、看護師やSVの経験が生きていると感じることの一つが、お年寄りとのコミュニケーションだ。SVとして海外で言葉があまり通じない環境を経験したことが、島に来て役に立ったという。

医師のいない島における医療や看護、介護は、かつて活動したマイクロネシアと似ている部分もあると話す宮

井さん。「すぐに緊急搬送を要請しなければいけないのか、しばらく様子を見ていたほうがいいのかといった判断が重要です」。

経験豊富な宮井さんは、村の看護師たちのやりとりにも加わる。「1つさの時に相談できる安心感は大い」と同村の肥後正司村長からも評価されているという。

当初の地域おこし協力隊の任期だった3年間は終了したが、契約を延長し、役場職員として活動を続けている。現在、夫は横浜で暮らしており、3カ月に1度会う程度だという。「デイケアのキャッチフレーズが、『元気で長生きパラダイス100』なんです。看護を必要とする現場でずっと苦勞して一生懸命生きてきたお年寄りの力になりたい」

宮井さんは、まだまだ現役だ。

地域おこし協力隊に 応募するには

地域おこし協力隊員は市町村などの地方自治体が個別に募集しているが、一般社団法人移住・交流推進機構（JOIN）が全国の自治体の募集をまとめてホームページで公開しており、地域や活動種別、待遇などのカテゴリで検索できる。その他、各自治体がホームページで募集情報を公開している場合もあるが、どちらの場合でも、当該自治体の担当部署宛てに必要書類を送付するなどして応募することになる（独自の説明会や、専用の応募サイトを設けている自治体もある）。

なお、募集案件によっては運転免許のほか、旅行業務取扱管理者や保健師といった特別な資格・免許が条件となることもある。宮井さんの場合も、看護師の資格を生かして応募している。

地域おこし協力隊員の任期は最大で3年間だが、大抵はまず1年間の契約で赴任して活動し、その後、受け入れ先の自治体との協議で継続・延長を検討することになる。

地域おこし協力隊の情報はコチラ
<https://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/>



宮井さんが現在活動する平島の港にて



バヌアツ派遣時代。看護学校の生徒たちと宮井さん



見守り支援で、日々何軒もの家を精力的に回る宮井さん



みやいみつこ
宮井美津子さん
SV/基礎保健/ネパール/2007年度0次隊、
看護師/バヌアツ/2010年度4次隊、
マイクロネシア/2013年度3次隊・千葉県出身

看護師、介護補助員。東京通信病院高等看護学院を修了後、東京通信病院を経て横浜通信病院に移り、看護部長も務める。働きながら、大学・大学院で学習を続けた。SVとして3度の派遣を経験し、現在、トカラ列島の十島村に在住。



隊員時代の藤川さんはシェフを目指す学生たちに衛生管理を含む料理全般を指導した



現在もにぎわう夜の荒木町。かつての花街の面影もある



あたぼう館の店内での藤川さん(中央)と板前、おかみ。開店と同時にカウンター18席、テーブル16席が予約の客で埋まっていくほど人気の店



ふじかわだいすけ
藤川大輔さん
タンザニア/料理/
2011年度3次隊・兵庫県出身

高校卒業後、18歳で東京、営業職に就くが、父の病気によって実家のある兵庫県姫路市に帰り、酒類の卸業を経てフレンチレストランの料理人を5年ほど務める。同時期に栄養士の資格を取得。再び上京し、35歳から小学校の給食調理の仕事に就く。協力隊ではタンザニアの観光大学のフードプロダクション学科で活動。帰国後の2014年にあたぼう館を開業。

飲食店を開業するには

飲食店を開業するには、開業資金(通常は自己資金と日本政策金融公庫などからの借入で賄う)、店舗にする物件、食品衛生責任者の資格、収容人数が30人以上の場合は防火管理者の指定も必要になる。調理師免許は必ずしも取得が求められていない。他に営業許可申請、食品営業許可申請など各種の届け出も必要だ。

物件選びは期間を要するが、藤川さんも寿司店を出す場所を探して東京中を回った。荒木町に一歩足を踏み入れた瞬間、「ここなら間違いがない。夜、売れる」と確信したという。30代にして土地を購入し賃貸アパートを建てた藤川さん。その際には「地位も実績もない私に貸してくれる銀行を見つけるのに何十行も回りました」。そうした経験を通してビジネス感覚が培われたのは間違いがない。経験に裏づけられた勘に加え、江戸前寿司の継承というコンセプトも成功を支えているに違いない。



あたぼう館の店内

テルのシェフとしてお金を稼いでいい家に住んで高級車に乗りたい、といった声が上がった。「当時の一流シェフの月収を学生に伝えて、少なくとも同じぐらいのスキルを身につける必要性をわかってもらいました」

翌日、3人の学生が藤川さんのところにやって来た。自分たちには時間がないことがわかったという。唯一の実習講師である藤川さんが帰国するまでに技術を吸収したい、と。それからは学生たちの学ぶ姿勢が大きく変わった。

この経験で藤川さんが得た習慣がある。人間が何を考えているのかを考えること。上に立つ者は周囲から常に見られていると意識すること。その上で、Win-Winの関係構築するための努力をすることだ。

タンザニアでは親しくなった人から「日本人だから寿司を作ってほしい」と頼まれることもあった。自らのアイデンティティを改めて考えたという。

「帰国時には40歳が目前だったので、残りの職業人生は食を通して日本の伝統文化を伝える仕事かと思いました。中でも寿司店は勝負しやすかった。高級寿司店と回転寿司店の二極化が進み、町の社交場のような寿司店が減っていたからです」

ついに自らのビジネスが定まった藤川さん。しかし、飲食業界での経験は長くても、寿司を本格的に握ったことはなかった。つてをたどって経験豊富な寿司職人に来てもらった。「私も教えてもらって握っています。技術が店で一番高いわけではありませぬ。経営者の仕事は別にあり

ます。他の店との差別化を図ったり、対外的なコミュニケーションをしたり、スタッフの待遇を改善したり」

あたぼう館には、江戸情緒が濃い荒木町という町の存在も欠かせない。町に魅力があるからこそ人が集まり、2軒目、3軒目として来る客も多い。藤川さんは人と人、店と店との付き合いが色濃く残るこの町との「持ちつ持たれつ」の関係を大事にしている。祭りやイベントの実施、広く荒木町を知ってもらうためのメディアへの発信のほか、ホームページでは同町にある店の紹介も行っている。

煮穴子と江戸甘味噌漬けの通販にも江戸の食文化を発信するという思いがこもる。今後は「落語や切り子などコラボして江戸文化をトータルで発信する」というライフワークを構想中だ。

職種：料理



寿司店経営

日本の伝統文化に携わりたい 東京荒木町で江戸前寿司を継承する

醤油漬けや酢締め、焼き、煮などの「仕事」でひと手間を加える本格的な江戸前寿司。古くから続く食文化を継承するという夢を描いて実現したOVがいる。昔は花街として知られた東京・荒木町で「あたぼう館」を経営する藤川大輔さんだ。

あたぼう館は高級寿司店でも回転寿司店でもない昔ながらの「町の寿司店」である。職人の仕事が行き渡った寿司を、日々の仕事で得たお金で食べられるぐらいの値段で提供している。

「高校を卒業して東京に出てきた時、この大都会でいざれビジネスがやりたい、と漠然と思っていました」

事業を始めるにはさまざまな人と出会って生きた知識を吸収する必要があると直感した藤川さんは、高級な飲食店を食べ歩いた。

「おいしいものを一緒に食べたり飲んだりすると心が通じたり、教えてもらったりすることが多いでしょう。

そんな大事な時に気後れしないように、ひととおり経験しておこうと思えました。私が食の世界と関わったきっかけです」

22歳の時に父親が病気で倒れ、いったんは地元の兵庫県に戻った。酒店の卸を経て、ホテルのフランス料理店に勤めつつ、「ビジネスの種」を探す努力を続けていた。

「面白い事業を手がけている社長を見つけたら、『お金は要らないので働かせてください』と飛び込んでいました。ビジネスの最前線を肌で体験できるのだから、すごく勉強になりました」

再び上京して選んだ仕事は小学校の給食センター。当時は30代半ば。目の前の忙しさに流されるのではなく、料理のスキルを生かしつつ、今後の人生で何をやるかを見極めるゆとりを確保するためだった。

空き時間を使って取り組んでいた目黒区内の国際交流ボランティアの



あたぼう館では「名物煮穴子」や「江戸甘味噌漬け」の通信販売を通じて江戸前の味を広く知ってもらおうとしている

縁で協力隊を知り応募、料理隊員として派遣が決まった。赴任地はタンザニア。国立観光大学で学生たちに調理実習を行った。

「学生のモチベーションは高いのですが、忘れ物や遅刻が多くて、片づけの習慣も身につかない。なぜなのかを考えた時、彼らには成功体験もロールモデルもないことに気づきました」

藤川さんは学生に10年先にどうなっていたいのかを考えさせた。ホ



「島根県でラオス語の通訳をしてくれる人はいませんか」
ある弁護士からNPO法人国際活動市民中心(CINGA)に連絡が入る。全国のさまざまな国際協力団体と交流のあるCINGAは、あらゆるネットワークを駆使し、6時間後に島根県で通訳できる人を紹介した。そのCINGAの中心的存在が、1999年に青少年活動隊員としてルーマニアに派遣された新居みどりさんだ。

「CINGAは、外国人相談や日本語教育など、日本に住む外国人の支援を行う団体です。自分たちでも事業を行います。全国の自治体や国際交流協会のネットワークを生かして活動しているので、直接支援より間接支援。中間支援組織としての要素が強いですね」

新居さんが担うのは、コーディネーターの統括役。
「事業は、すべて『外国人総合相談

上げる。彼らが古新聞を売って収入を得るしくみをつくったのだ。
このルーマニアでの経験が、新居さんを「国際協力」に目覚めさせた。新居さんは、もともと国際協力について学びたいと、帰国後イギリスに留学。しかしイギリスでは、ルーマニアで感じなかった居心地の悪さを感じた。

「友人が一人もできなかったのです。先進国であるけれど、とても孤独だと感じ、日本に住む外国人も、こんな居心地の悪さを感じているのではないかと思いました。その時に、これは海外じゃなくて内なる国際化が必要だ、日本の外国人の問題に取り組もう、と予定を繰り上げて1年で帰国しました」

帰国後はJOCA(公益社団法人青年海外協力協会)で働きながら、早稲田大学、同大学院で多文化共生について学んだ。卒業後は、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターでコーディネーター職を得るが、妊娠で退職。しかし出産後、イベントや勉強会での出会いから、国際移住機関(IOM)や再び東京外国語大学で働いた。一時は最大四つの組織を掛け持ちしたが、2015年にCINGA一本に絞った。

「内なる国際化は、行政だけがやるものではなく、市民活動が欠かせません。私がルーマニアで行った地域

職種：青少年活動



外国人支援

ロマの子どもたちへの 支援をきっかけに外国人支援の 大きなネットワークづくりへ



新居さんへの要請はルーマニアの小学校で
日本文化を教えることだった

支援センター』『多文化共生のためのCINGA地域日本語教育支援事業』『少数言語通訳者派遣コーディネーター事業』などプロジェクトベースで動いていて、それぞれコーディネーターがいます。その複数のコーディネーターを円をつなぐのが私の役目。CINGAの事業を世の中に伝えたり、地域や実際の現場に行つて声を拾ったりもしています」

「外国人支援をコーディネーターする」という新居さんの活動の原点は、24年前の協力隊経験にある。ルーマ

ニアの教育委員会に派遣された新居さんへの要請は、多民族国家のルーマニアで日本文化を通して異文化理解教育を行うというものだった。
「小学校で日本語教室や折り紙教室を運営しました。ルーマニアの子どもたちにとって、日本文化に触れることは意味のあることでしたが、気になったのは、学校にいる子どもだけでなく、道端にいた子どもたちでした。彼らはロマと呼ばれる、いわゆるジプシーの子どもたちで、学校にも行かず、自暴自棄な生き方をしているように見えました。青少年活動隊員として、こうしたロマの子どもたちも何とかしなければいけないのではないかと考えたのです」

そこで学校にとどまらず、地域全体を支援することに目を向けた新居さんは、アメリカのボランティア組織であるPeace Corps(ピースコー)のメンバーと一緒に、ロマの子どもたちを支援する会を立ち

※CINGA…Citizen's Network for Global Activitiesの頭文字



新居みどり(旧姓・細井)さん
ルーマニア/青少年活動/
1998年度3次隊・京都府出身

短大卒業後、叶匠壽庵の裏千家茶室に勤務。1999年4月、青少年活動隊員としてルーマニアに派遣される。2001年4月に帰国後、イギリス留学を経て、早稲田大学と同大学院で多文化共生について学ぶ。東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター(現・多言語多文化共生センター)のコーディネーターを経て、11年にNPO法人国際活動市民中心(CINGA)に参加。15年から職員に。



新居さんのCINGAでの役割はコーディネーターの方々を統括する業務。とはいえオフィスに訪れた外国人相談者と面談することも少なくない

の子どもたちへの支援活動も、まさに市民活動でした。CINGAは市民活動がベースです。東京で外国人を支援する団体はまだ少ない、ここにかけてみようと思いましたが、しかし入職した当初は、なんと年収40万円。「絶対になんとかしよう」と奮起した新居さんは、お金がかかるプロジェクトベースの仕組みをCINGAのメンバーたちと構築し、事業を拡大。現在は、国からの受託で5カ所の相談センターを運営し、事業規模は約3億円、72名のスタッフを抱えるほど成長。CINGAの強みとして、弁護士や行政書士、精神科医などの多様な専門家47名が会員として支えていることも大きい。

「協力隊経験を経て、私のように日本国内での国際協力に目覚める人は多いと思いますが、仕事にするには

難しいのが現実です。仕事というより、自分の住む地域でいろいろな専門家として、ボランティアに協力隊経験を生かしてほしいですね」

実は冒頭の「島根県でラオス語の通訳をできる人」も、協力隊のネットワークから探した元協力隊員だ。

「協力隊員は、その国の言語が話せて、何よりもその国が嫌いじゃない。日本に住む外国人にとって、これほど心強い存在はありません」

新居さんは「CINGAのスタッフの半数以上が外国人で当事者たち。この人たちの力をもっと発揮してもらえるように仕組みをつくっていきたい」と考えている。

「そうすれば、外国人にとっても、日本人にとっても生きやすい社会、真の意味で『多文化共生』が実現するのではないのでしょうか」



ルーマニアでロマの子どもたちの新聞配達プロジェクトを立ち上げた新居さん(左端)と協力者(右から2人目)

NPOやNPO法人を 立ち上げるには

ボランティア活動を続けたいと考えて、特定非営利活動法人(NPO法人)に入職したり、自らNPOを立ち上げたりするOVは少なくない。NPOを立ち上げるには、まずビジョンとミッションを明確にすることが必要だ。ビジョンは理想とする世界のイメージ、ミッションはそれを実現するために達成すべき目標を指す。CINGAの場合は、多文化共生社会の実現がビジョン、外国人相談など各プロジェクトがミッションに当たる。

次に仲間を集めて役割分担をし、活動に取り組むことになる。NPOは任意団体で、特に手続きは必要ないが、NPO法人を創設するには法律に基づく手続きが必要になり、10人以上の正会員がいることや、理事3名以上、監事1名以上がいることなどハードルは上がる。一方、法人化によって社会的信頼性が高まり、法人名義で契約ができるなどメリットも多い。

新居さんは、「市民活動は社会の課題に即して、行政ではなかなか手が届かない活動を担うことになります。市民活動とは、社会課題を解決するための理念と活動があって、そこに人が集うこと。活動が社会に認められて、組織となっていく。NPO法人も原点は市民活動なのです」と話している。



新居さんの市民活動の原点はルーマニアでの活動にある



つばい はじめ
坪井 創さん

PROFILE

JICAメキシコ事務所長。民間企業、在ポリビア日本国大使館勤務を経て、1999年国際協力事業団（現JICA）入団。メキシコと日本間で若手人材の交流を促進する「日墨交流計画」を担当したのがJICA人生の始まり。人間開発部、グアテマラ事務所、中南米部、総務部、ポリビア事務所、青年海外協力隊事務所局長などを経て、2021年10月より現職。



もちづき ひさし
望月 久さん

PROFILE

1967年、海外技術協力事業団（現JICA）に入団、青年海外協力隊事務局に配属。70年にエルサルバドルに協力隊調整員として派遣される。その後、エルサルバドル駐在員、パラグアイ駐在員、メキシコ事務所長、青年海外協力隊事務所局長などを歴任し、2001年から03年までJICA理事を務める。

比較的高かったため、他の中南米諸国に比べて協力隊派遣は遅く、93年から派遣に尽力したのが、89年からJICA

多岐にわたる協力を行ってきた。

メキシコは1人当たりのGNPが比較的

JICAは1973年に拠点を開設して以来、技術協力、資金協力（有償／無償）、協力隊派遣などを組み合わせた、環境、防災、産業開発、農業開発、資源・エネルギー、保健医療など

南北アメリカを結ぶ多様性に富む大國 太平洋を挟んだ日本の重要なパートナー 多彩な自然や文化で日本人にとって親しみのあるメキシコ。そこには長年の友好の土台がある。今年はJICA事務所が開設して50年、協力隊派遣も30年の節目。メキシコへの協力隊派遣のこれまでとこれからとは。



1897年に榎本殖民団が日本からメキシコへ渡った。メキシコ事務所長時代、メキシコ南部・アカコヤグアの公園に建立された榎本殖民記念碑を訪れた望月さん（左から2人目）

「スペイン語を話し文化的な素養もある日本の若者に会って、協力隊の趣旨をすんなりと理解し、『ぜひ来てほしい』と言ってくれました」

「スペイン語を話し文化的な素養もある日本の若者に会って、協力隊の趣旨をすんなりと理解し、『ぜひ来てほしい』と言ってくれました」

「既に入国で分野によっては高度な技術レベルがある。日本の協力も円借款、技術協力が実施され、協力隊派遣は不要と考えられていました。しかし地方を回れば先進国並みの大都市と格差があり、農業や保健医療、教育分野で、現地の人たちと一緒に汗を流し貧しい人々の生活を向上させる、協力隊員でなければできない活動があると派遣の必要性を強く感じた」と振り返る。

当時、南米に派遣される隊員は任地赴任前のスペイン語の現地研修をメキシコで受けていた。望月さんはメキシコ外務省の担当官に協力隊事業を紹介すると共に、隊員を送り出す社行会に引き、隊員たちと交流してもらった。

派遣を増やしていく方針です」。

「この30年で、メキシコの人口は約4000万人増え、GDPも3倍近くに

現JICAメキシコ事務所長の坪井創さんは、派遣の今後を次のように話す。「この30年で、メキシコの人口は約4000万人増え、GDPも3倍近くに

一方、日本大使館で行われていた日本の政府関係機関による会議でも協力隊派遣への賛同を広げるなど、派遣に向け双方の国の地ならしを続けた。そうした努力が実り、93年5月に協力隊の派遣取極が締結。農業や保健医療分野の隊員派遣が始まった。現在までに累計400人以上が派遣され、農業、保健、社会福祉、環境、スポーツ、日本語教育などの分野で貢献している。

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈メキシコ〉

砂漠にサボテン、海岸リゾート、マヤ・アステカ文明、そして大都市まで多様な豊かな自然と文化の国、メキシコ。青年海外協力隊の派遣は今年7月で30周年を迎えた。

メキシコの基礎知識

メキシコ合衆国	派遣実績
面積：196万平方キロメートル（日本の約5倍）	派遣取極締結日：1993年5月3日
人口：約1億2,601万人（2020年国立統計地理情報院 INEGI）	派遣取極締結地：メキシコシティ
首都：メキシコシティ	派遣開始：1993年7月
民族 ^(※1) ：欧州系（スペイン系など）と先住民との混血（約60%）、先住民（約30%）、欧州系（スペイン系など）（約9%）、その他（約1%）	派遣隊員累計：490人
言語：スペイン語	※2023年6月30日現在
宗教：カトリック（国民の約7割）（2020年 INEGI）	出典：国際協力機構（JICA）
※2023年6月7日現在	
出典：外務省ホームページ https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/data.html#section1	
※1 民族についての出典は、協力隊50周年誌「持続する情熱」	

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈メキシコ〉

よこ おさき こ
横尾咲子さん

体育 / 2003年度2次隊・山形県出身

PROFILE

大学院でダンス・セラピーの研究中に休学し、協力隊に参加。帰国後復学、修了後に民間企業に就職。2010年、NPO法人「手をつなぐメキシコと日本」を設立。11年に夫の故郷であるメキシコに移住。現在、メキシコ文化庁契約アーティストとして紙芝居の上演などを行う。また日墨文化交流プロジェクトを企画・運営。20年からメキシコ恵光寺の副住職も務める「踊る尼さん」。法名は墨西哥（メキシコ）に仏法の花を咲かせるという意味を持つ「墨咲（ぼくしょう）」。



上：横尾さんの紙芝居『スイミー』を見た子どもたちが、自分たちで演じてみようとする魚を工作
左：親子ダンス教室の様子。インクルーシブ教育の実現に向けて、保護者の積極的な参加も促した



笹川さんが提案して開催されるようになった母親学級。参加した妊婦に話をする保健センタースタッフと笹川さん（奥左から2人目）

ささがわ えみ
笹川恵美さん

助産師 / 1999年度2次隊・福島県出身

PROFILE

小学生の頃から協力隊に関心を持つ。看護師と助産師の資格を取得し、助産師として病院に5年半勤務後、旅行して楽しかったメキシコの要請に応募し、協力隊に参加。帰国後は国立保健医療科学院で公衆衛生を学び、国際保健分野の専門家として活動後、東京大学大学院医学系研究科で博士号を取得。東京大学大学院の助教を経て、2023年4月から日本赤十字看護大学の准教授として母性看護学と国際保健助産学を教えている。



母子保健、障害児・者支援、ビジネス、スポーツと、幅広く協働

日本の5倍もの国土のあるメキシコ。各地で活動してきた隊員たちの足跡をたどると、メキシコの人々の寛容性と柔軟性がそれぞれの活動を後押ししたことを感じる。

伝統的産婆と保健センターをつなぎ、安全なお産を増やす

1990年代、メキシコは既に経済的には先進国とされていたが、都市と農村部の格差が大きく、母子保健分野でもそれは顕著だった。99年から2年間、助産師隊員として活動した笹川恵美さんも経済的に弱い立場にある妊婦たちに寄り添った。笹川さんは日本で助産師を務めていたが、慣例的な陰切開など、お産への必要以上の医療介入が当たり前で、医療介入のない出産に関わったことがなく、そして自らの助産師としての力量にも自信を持てずにいた。「途上国に行けば昔からの自然なお産を学べ

を受け入れてくれた。

笹川さんは保健センターでの母親学級の開催を提案すると、地域の妊婦を一人ひとり訪ね、参加を呼びかけて実施した。妊婦健診に来る女性には、待ち時間を利用して、妊娠時期が進むにつれて成長する胎児の様子を絵に描いて伝え、望ましい食事や生活などを個別に指導した。また、センタースタッフには、普段から妊婦に優しさを持つて接することで、妊婦を尊重することの大切さを伝えていった。

その後、笹川さんは看護師長にさらに踏み込んだ提案をした。それは希望があれば、伝統的産婆が保健センターでの分娩介助を可能にするというものだった。読み書きのできない人も多い地域で、十数人いた伝統的産婆は医療の専門的知識を受けていないため、産科学的知識に乏しいと見なされ、保健センターと関わる機会は少なく、スタッフの抵抗もあった。

「でも、清潔な医療機材のある保健センターの分娩室を無料で使えるようになれば、妊婦さんたちが頼りにする産婆さんによる分娩がもっと安全に行えるようになります。看護師長はその考えに賛同してくれ、積極的に産婆さんたちとの連携を進めてくれました」

笹川さんは看護師長と共に、伝統的産婆の技術や知識を向上する研修を定期的に行った。保健センタースタッフと

るのではないか」。そんな思いが協力隊への参加理由の一つだった。

配属先は、中部のベラクルス州のカテマコ市にある保健センターで、地域の貧しい人々に無料で医療を提供する施設だった。一方、富裕層は私立病院、社会保険を納めている公務員などは専用の病院を受診する仕組みになっていた。また、伝統的産婆の立ち会いの下、自宅出産する女性も多かった。

同州では、乳幼児死亡率や妊産婦死亡率の改善を図るため、JICAの母子保健プロジェクトのパイロット事業が行われたことがあり、家族計画サービスの提供や子どもの予防接種が進み、母子手帳を使った妊婦健診も広まりつつあった。

要請内容は、地域住民を対象にした母子保健サービスの改善と、家族計画や母子保健についての知識の向上で、医療行為は認められていなかった。なおメキシコに助産師という仕事はなく、分娩介助は医師や伝統的産婆が担う。赴任まもなく、笹川さんはショック

がな出来事に遭う。飛び込みで運ばれてきた逆子の分娩中、胎児の頭が出てくる前に、医師が母体から胎児に酸素を供給しているへその緒を切ってしまった。い、赤ん坊が亡くなってしまったのだ。「危険な医療が行われていることを目の当たりにしました。そして、ぼうぜんとしている妊婦さんに、担当看護師が

伝統的産婆がコミュニケーションを増やして信頼関係を築くと、伝統的産婆としか関わりのなかった妊婦が保健センターを訪れるようになり、地域の母子保健の改善につながった。「いろいろなチャレンジをする場を提供してもらった協力隊の2年間でした」

そう振り返る笹川さん。メキシコでの体験を機に、科学的根拠のない不適切な医療介入を受けて女性の心や身体が不必要に傷つくお産を減らしたいと、「出産のヒューマニゼーション（※1）」を生涯の研究テーマに決め、探求を続けている。

身体表現と紙芝居ですべての子どもが安心して学べる環境づくり

メキシコ政府は2001年に「障害者の権利条約」(※2)を国連に提案し、社会で最も脆弱な人々を排除しない社会の実現を訴えた人権意識の高い国だ。横尾咲子さんは、それから2年後、障害のある子どもとない子どもが一緒に学ぶインクルーシブ教育を進めるため、イダルゴ州チャパントングの養護学校に体育隊員として赴任した。

日本国内の大学院の修士課程でダンス・セラピーを学ぶ中で研究の実践の場を求めていることと、バックパッカーとして世界を旅し興味を持った国際協力に携わりたいという思いが重なり、



笹川さん（右）が作った、妊婦向けの資料。妊娠初期・中期・後期で赤ちゃんがどのような状態なのか、妊婦はどのように過ごせばよいのかをわかりやすく伝えた

開口一番に『なんで妊婦健診に来なかったの？来ていれば逆子を早く発見できていたのに』と怒鳴ったのです。普段はみんな私に対して優しいのに、妊婦さんにはあまりに威圧的で悲しくなりました。利用者が貧困層ということが、余計に看護師を威圧的にさせていたのだと思います」

自身が分娩に直接携われないという無力感も感じながら、どうすればこの地域の妊婦が安心してお産を行えるようにできるのかを考えた笹川さん。カウンターパート（以下、CP）の看護師長はJICAのプロジェクトによって日本で研修を受けた人で、笹川さんの活動に理解を示し、さまざまなアイデア

体育教諭の資格を生かし、大学院を休学して協力隊に参加した。

横尾さんは、リズム運動やダンスなどによる障害児のリハビリを受け持ったほか、五つの小学校を巡回し、障害がある子どもとない子どもが一緒に楽しめる運動や、障害者への理解を深める授業を行った。

授業では、赤い魚の中で1匹だけ真つ黒な魚が個性を生かして仲間と力を合わせて敵を撃退する『スイミー』や、シルヴァスタインの『ぼくを探しに』などの絵本を紙芝居に仕立てて子どもたちに見せた。

「図書館も本屋もない田舎で、子どもたちはとても喜んでくれ、それを基にみんなで演劇をしたりしました」

横尾さんは市役所に協力して、集落を回って障害児のいる家庭を探し、データも残した。それにより養護学校に通っていない障害児の存在や、その背景にある貧困、社会福祉制度の不十分さなど重い問題に直面することになり、無力さに悩んだという。

「私には医療や障害児教育の専門知識がないため、養護学校の体育も、障害のある児童がいる家庭のデータ整備も、それ以上に展開させることはできず、悶々（もんもん）としました。でも、たくさんの子どもたちが、私に来るのをいつも楽しみに待っていてくれたので、それが支えでした」

※1 出産のヒューマニゼーション…人間の自然な営みである分娩を生理学的に捉え直し、過度な医療介入を避け、人間の産む力生まれる力に敬意を表しながら母児の力を最大限に生かせるような分娩時のケア。
※2 障害者の権利条約…あらゆる障害者（身体障害、知的障害および精神障害など）の尊厳と権利を保障するための条約で、2006年に国連総会で採択された。日本は2014年に批准。

篠原優衣さん

バドミントン/2022年度7次隊・栃木県出身

PROFILE

8歳からバドミントンを始める。学生時代にJICA北海道でインターンをして協力隊OVや各国の研修員と交流したこと、インドネシアの村でのバドミントンを通じた交流体験をきっかけに協力隊に応募。当初、2019年度3次隊でエチオピア派遣の予定だったがコロナ禍によって約2年半の国内待機に。任国変更となり、2022年8月にメキシコ派遣。



メキシコの子どもたちにバドミントンを体験してもらおう。「公園などで気軽に楽しんでもらえるようにしたいのですが、用具が身近にないと治安の問題から子どもだけで外で遊べないことがネックです」



小沼さんのグアナフアト大学でのレクチャー風景

小沼 勇さん

SV/キルギス/輸出振興/2009年度9次隊、SV/品質管理・生産性向上/2014年度3次隊・北海道出身

PROFILE

大学工学部を卒業後、日本の商社、外資系石油化学メーカーなどに勤務し、品質管理や生産管理、アメリカ式マネジメントに携わる。定年後は日本の化学メーカーのインド副社長として2年駐在。その後、シニア海外ボランティア（貿易振興）に参加し、キルギス共和国で10カ月活動。2015年にメキシコへ。帰国後は、SVの経験を生かしてドイツ自動車工業会に所属し、バスやトラックなどの排気ガス浄化システム専用の尿素水を認証する監査を行っている。



活動の舞台裏

文化的な刺激を求めて

フリーダ・カーロやディエゴ・リベラといった著名な画家たちを生んだメキシコ。だが、横尾咲子さんが体育教諭として活動したチャパントングは「新聞も売っていないようなところで、娯楽が何もなかった。学生時代に舞踊や舞台芸術にどっぷりはまっていた私は文化的な刺激に飢えていました」と話す。

メキシコシティまではバスで片道3時間かかるが、「広大なメキシコでは近いほうで、お休みの時にはメキシコシティに出かけていき、劇場に行ったり、ダンスのワークショップに参加したりしていました」。そんな中で将来の夫となるアーティストと知り合った。



オアハカ国際ブックフェアの一環で、子どもたちを対象に行ったパフォーマンス
特製紙芝居では日本人の移民の歴史などを紹介することも

メキシコは文化・芸術やそれに携わる人に対する姿勢が日本とは大きく異なる。「日曜日になると美術館や博物館が無料開放され、誰でも楽しむことができる。それが当たり前なんです」。

現在、メキシコ文化庁の契約アーティストとして、紙芝居や舞踊などの公演を行う横尾さん。「先日国立芸術センターの野外広場で紙芝居を上演しました。『面白いね、珍しいね』と喜んでくれるので、とてもやりがいがあります。お客さんは無料ですが、私たちアーティストにはちゃんと報酬が支払われています」。

11年にメキシコへ移住し、メキシコ文化庁の契約アーティストとして紙芝居の上演などを行うと共に、NPO法人「手をつなぐメキシコと日本」の理事長として両国の文化交流に熱心に取り組んでいる横尾さん。さまざまな活動の縁がなくなり、2年前からは平和と共生という仏教の精神を伝える超宗派の寺の副住職も務める。移住してから12年がたつ。

「メキシコには搾取と侵略に耐えてきた歴史があります。それ故に、いい意味で諦めがよく、人生は短いのだから毎日ハッピーに生きようという価値観がある。他者を受け入れる器の大きさを改めて感じています」

「メキシコには搾取と侵略に耐えてきた歴史があります。それ故に、いい意味で諦めがよく、人生は短いのだから毎日ハッピーに生きようという価値観がある。他者を受け入れる器の大きさを改めて感じています」

「メキシコには搾取と侵略に耐えてきた歴史があります。それ故に、いい意味で諦めがよく、人生は短いのだから毎日ハッピーに生きようという価値観がある。他者を受け入れる器の大きさを改めて感じています」

「メキシコには搾取と侵略に耐えてきた歴史があります。それ故に、いい意味で諦めがよく、人生は短いのだから毎日ハッピーに生きようという価値観がある。他者を受け入れる器の大きさを改めて感じています」

「メキシコには搾取と侵略に耐えてきた歴史があります。それ故に、いい意味で諦めがよく、人生は短いのだから毎日ハッピーに生きようという価値観がある。他者を受け入れる器の大きさを改めて感じています」

先日、横尾さんは配属先の同僚と18年ぶりに再会した。

「当手を振り返って、同僚が『教えてもらうよりも、日本という遠い国から来る若い人が楽しく過ごせるようにしたいと思っていました。だから経験がなくても気にしていなかった』と言ってくれて、ようやくほっとしました。その恩返しのためにも、両国の懸け橋になって文化交流を続けていきたいと思っています」

日系企業の進出が多い地域で企業、学校、人をつなぐ

2005年のEPA発効後、増加する日系企業の進出を反映し、メキシコ

「日本は、海外で活躍できる若い人材がアジアの他の国に比べ非常に少ないことが海外での競争力の低下につながっていると思います。日本の文化を背負い、現地の人と共に生活し、心に触れて仕事をする、それが海外で活躍できる人材です。奮闘している隊員を応援したかった。実際に日系企業に就職したのはほんの数人でしたが、隊員に選択肢を示すことはできたのかもしれない」

競技普及のために全国でバドミントンを紹介

「協力隊員がメキシコの社会課題に向き合いながら、メキシコの人々と一緒に活動できる領域が相当であると改めて感じています」というのは、前出のJICA AMEXICO事務所の坪井所長だ。国内の多様な課題に加えて、スポーツや文化系の活動ポテンシャルなどを考慮し、地方での展開や、参加年齢も幅広くしていきたいと考えているという。

近年、メキシコではSV中心の派遣だったが、若手の協力隊員の派遣も増

の自動車産業の振興のために、生産管理や電子工学の分野で貢献するシニアボランティア（以下、SV）の要請が増えた。

自動車産業集積地であり、現在、日系企業の進出は約200社と、州別で最多となるのがグアナフアト州だ。小沼さんは、州内にあるグアナフアト大学に15年に派遣された。

経営学部長をCPに、教員に対して「品質管理」について指導するという要請だった。しかし、「日本人を招いて実践的な教育を進めたいと考える意欲的な学部長とは異なり、先生たちからは『自分の仕事が脅かされるのでは』と警戒されてしまい、直接教えること

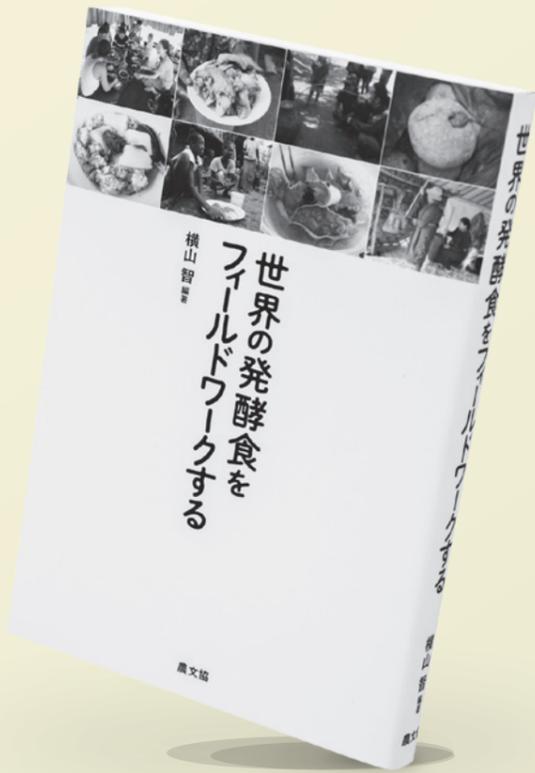
えている。そのうちの一人が篠原優衣さんだ。メキシコ初のバドミントン隊員で、現在、首都メキシコシティにある教育省スポーツ局で、バドミントンの普及、育成選手への競技力向上、指導者の指導力向上などに当たっている。「バドミントンって何？」と配属先の人から聞かれるほど、メキシコでは知られていないスポーツですが、オリンピック選手も出ていますし、国として普及・育成に力を入れ始めたところなんです」。

配属先には用具類がなかったため、地方で普及活動を行う際に使うラケットやシャトルを日本バドミントン協会の協力を仰いで提供してもらい、現地業務費を申請して持ち運びのできるネットセットなどを購入することから活動が始まった。

普及活動は、地域の子どもたち500人から1000人を対象にバドミントンを紹介し体験してもらう形が中心で、全国を回る大規模なイベントだ。「配属先の同僚と3人ほどのチームを組んで各地の地方自治体との調整を進め、実施の際には10人ほどで、泊まりがけで出張します。バドミントンのことは知らなくても、私のことを仕事仲間として受け入れて、普及活動がうまく進むよう柔軟にサポートしてくれるのでとてもありがたいです」。

ただ、イベントを通じて子どもたち

いま、 読みたい 電子書籍



世界の発酵食を フィールドワークする

編著：横山 智
著：藤本 武、山本宗立、砂野 唯、中川智行、平田昌弘、山崎寿美子、小林 知、大澤由実、丸井淳一郎、木村啓太郎、佐々木綾子、森永由紀、岩橋 均
発行：農山漁村文化協会（2022年1月）

https://www.amazon.co.jp/dp/B0BTNHX1T6?ref_cm_sw_r_cp_ud_dp_FC3ZTMS4H3BBT7PNS1KE

さまざまな発酵食の伝統を知ることで 異文化への興味のきっかけづくりに

本書の編著者で地理学者の横山 智さん（名古屋大学大学院環境学研究科教授）は1992年にラオスへ派遣された協力隊OVだ。電子工学隊員としてビエンチャンの郵便電話通信学校で、ラオス各地から研修に集まる郵便局や電話局などの職員へ技術教育を行った。

「まだ経済開放から間もない時期で外国人の移動制限が厳しく、地方出身の教え子たちが自らの民族や地元風習について話すのを聞いて面白そうだと思っても、見に行くことはできませんでした」

帰国後は国際協力を志して文系学部で学び直した横山さんだったが、フィールドワークに魅かれて地理学や文化人類学にのめり込み、気がつけばラオスを中心に東南アジアの焼畑農業などを専門とする研究者に。その調査中、現地で伝統的に食されている納豆にも出会い、研究が続いてきた。「市場を見て回ると、地域ごとに見た目や味、使い方も違ったりするので比較してみたら楽しくて（笑）」。

数年前、学問領域を横断して発酵食に関わる日本国内の専門家を集め、世界の発酵食をより広く研究する研究会が発足。各自のアジアや中東、アフリカでの研究について紹介する展示会を名古屋大学博物館で催すのに合わせ、展示内容とリンクさせた内容にしたのが本書である。

「ネパールの家庭の納豆作りで煮豆に灰を混ぜているのを不思議に思って日本の微生物学者に話したところ、アルカリ性にするので発酵菌を選択的に増やしている可能性を示唆されました。現地の方が経験的に行うプロセスには必ず何らかの意味があるので、それを現地で聞き取るフィールドワーカーと微生物学の専門家など、諸分野の研究者が組むことにはとても意義があります」

内容は「主食」「副食」「調味料」「嗜好品」の4部構成で、ラオスの魚醤「パデーク」の仕込み技術の意味を成分分析から考察したり、タイ北部の後発酵茶「ミアン」の消費にまつわる社会変化を論じたりと

ーマは多岐にわたる。著者の一人には協力隊OVで帯広畜産大学人間科学研究部門教授の平田昌弘さん（シリア／生態調査／1993年度2次隊）もあり、アジアから北アフリカにかけての発酵乳技術について、日常生活でのヨーグルトや馬乳酒の利用の様子も交えて紹介している。

本書には登場しないが、直近ではガーナで「ダワダワ」などと呼ばれる豆の発酵食品を調査してきたという横山さん。

「西アフリカのサバンナ料理に不可欠なだし素で、見た目は何だこれ！と思うような黒褐色の塊なのですが、その風味や使われている菌は納豆そのものです。協力隊員の皆さんは派遣国でいろいろな現地食に接すると思いますが、この料理や調味料は何だろう？などと思った時に興味を持って調べると、何か気づくことがあったり、相手の文化がぐっと親しみを持って感じられるようになるかもしれません。この本を通じて、そうした視点に気づいてもらえたら嬉しいですね」

この方に
聞きました！



よこやま とし
横山 智さん（編著者）
ラオス／電子工学／
1991年度3次隊・北海道出身

「そこがこの国の課題の一つなのだと思っています。でも、同僚たちは慣れていて、『これからタコスでも食べに行こうか』なんて明るく話をしていました」
バドミントンを通じてメキシコの子

「一方、篠原さんが驚いたのは、順調に準備が進んでいた普及イベントが財源不足を理由に突然キャンセルされることが少なからずあること。」

「『どうしたらバドミントンを続けてもらえるか、環境整備や遠隔指導の方法などに知恵を絞っているところですよ。』」

「『基礎的な練習の一つひとつに対して『どうしてこれをやるの？』と子どもたちからよく聞かれます。私の拙いスペイン語でもその動きの意味や目的、身体の使い方などを説明すると納得して練習してくれ、少しずつ上達してくんですよ』とその手応えを嬉しそうに話す。」

「年下の私に対して、同僚も地方の人も『メキシコまで教えに来てくれてありがとう』と敬意を払ってくれます。」

「『交流計画でメキシコで学んだ日本人の方が、協力隊に参加することも少なくありません。メキシコ人は日本人以上に愛国心のある方が多い。メキシコを好きになり、共に新しいことに挑戦する隊員は彼らからも温かく受け入れられるでしょう』と話す。」

「1999年のJICA入構時からメキシコと日本の間で若手人材の交流を促進する『日墨交流計画』(※)を担当し、メキシコと関わってきた坪井所長は、篠原さんのようにイキイキと活動する若い隊員たちの力も、今後の日墨関係に欠かせないと考えている。」

「『当地の日系社会はもちろんのこと、メキシコと関係の深い企業、大学、地方自治体なども多く、今後も日本にとつて大切なパートナーです』。先に挙げた横尾さんのように、協力隊経験後にメキシコに定住したり、仕事で駐在するOVは少なくない。今後そのネットワークを広げながら、日墨関係と隊員活動を盛り立てていきたいそう。



日本バドミントン協会からメキシコスポーツ庁にバドミントン用具が寄付された。篠原さんは国内約260市の学校で、寄贈された用具を活用した講習会を予定している

活動の舞台裏

24時間体制で安否確認

現在、バドミントン隊員としてメキシコシティで活動中の篠原優衣さん。ホームステイ先のホストファミリーとは密に連絡し合うというルールがある。しかし、当初はなかなか慣れなかったという。「毎日の予定を伝えるだけではなくて、例えば、外出時に『これから友達とご飯を食べます』『お店に着きました』『食べ終わったから今から帰ります』『家に着きました』と、スマホのSNSで連絡し居場所や移動を逐一連絡してほしいと言うんです」



キンタナロー州カンクン市で、同じ配属先で活動する三國由菜さん（体育／2022年度7次隊）と日曜日は自分のための練習に行くという篠原さんと練習仲間たち。その後、ホストファミリーとランチを取ったりするのが週末の過ごし方

「驚いた篠原さんがメキシコの友人に聞くと、『それは普通だよ』と言われた。誘拐や殺人などショッキングな事件が多いメキシコだからなのだろう。「スマホアプリを使って、GPSで家族の位置情報や持ち歩いているスマホのバッテリー残量などもわかるようにしている家族もいるそうです」

ホストファミリーが安全に気を使ってくれているおかげで、まだトラブルに遭ったことはないという篠原さん。「面倒でないかといえうそになりますが、私を思っていることなので、家族と決めたルールを守るようにしています。ホストファミリーがいるおかげで寂しい思いもせず、とても快適に過ごさせてもらっています」

専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ



今月の教える人 おぐにかずこ 小國和子さん

インドネシア/村落開発普及員/1994年度2次隊、
シニア隊員/インドネシア/村落開発普及員/1998年度0次隊・
大阪府出身

日本福祉大学国際福祉開発学部・同大学院国際社会開発研究
科教授。開発人類学をベースに農村開発援助実務および研究
に携わる。研究テーマは農村開発・生活改善・フィールドワーク
論・文化と開発・月経衛生対処など。

今月の
お悩み

今月のテーマ：隊員同士の意見の不一致

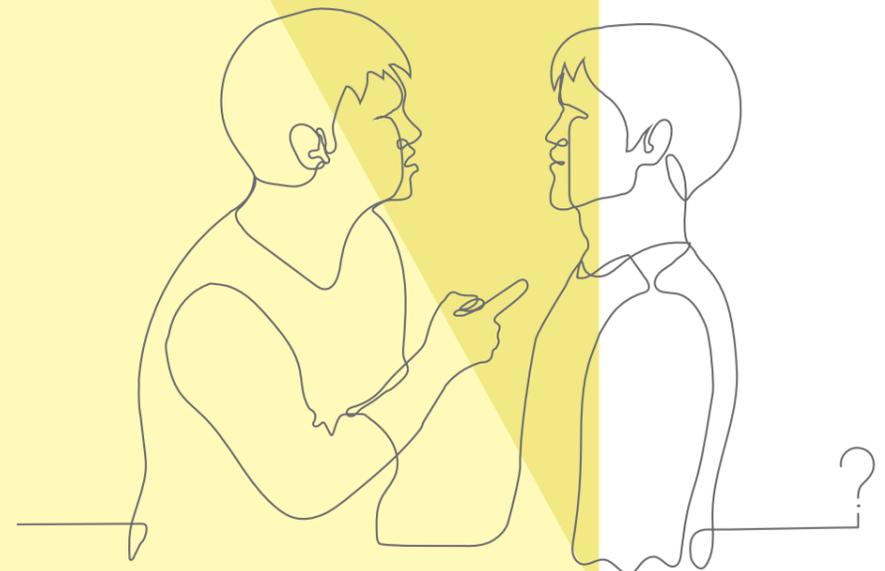
同じ職種の先輩隊員と
活動の取り組み方の違いで
険悪になってしまいました。

(コミュニティ開発/男性)

同じエリアで活動する同じ職種の先輩隊員とは、配属先の所属も同じだったり、同じ知り合いがいたりして、一緒に話題に上る機会が多いのですが、私とは活動に対するスタンスややりたいことが違い、意見が合いません。会合や分科会などでもよく一緒にいるのですが、私の考えを理解しようという気もない様子。こちらは後から赴任した立場なので我慢していますが、ストレスがたまります。

小國先生
からの
アドバイス

現地の人たちと個別の人間関係ができてくれば、
日本人同士はおのずと程よい距離が生まれます。
自分らしさを生かし代えがたい2年間に。



特に任期序盤に少なからず聞く悩みですね。日本であれば、会社で意見の合わない人がいてもやり過ごせるくらいの器量はあるはずなのに、派遣国だと大きなストレスを感じてしまうのは、日々緊張しながら現地の人たちと信頼関係を築くために奔走しているからでしょう。本来ならそこに全力を注ぎたいのに、日本から来た隊員同士の対人関係の悩みでストレスを抱えたくない気持ち、よくわかります。

コミュニティ開発をはじめ、特定の専門性に限らず応募できる職種の場合、隊員によって元々の学問分野も経歴も全く違うということが少なくありません。だから意見の不一致が生まれやすいのだと思います。でもそれは、一人ひとりが持つポテンシャルが多様だということの現れでもあるのです。

私からのアドバイスは、「やり過ごせるなら、無理に向き合わなくてもいいのでは」ということです。あなたがここに来た目的や思いを考えてみれば、目の前にまだ言葉を交わしていない現地の老若男女が山ほどいて、その人たちと順番に、丁寧

に、関係づくりをしようとしたら、2年なんてあっという間です。バックグラウンドが異なる先輩隊員と活動の考え方ややり方が違うことはある意味当然のことと、まずは自分のもやもやを肯定してあげてください。ただこれは、考えの合わない先輩隊員を無視してやりたいことだけ進めれば良いということではありません。相手はあなたより長い期間活動していますから、現地の人間関係のネットワークもできていますし、実は結構はうまいくか？悔しい思いも経験しているかもしれません。

なぜ先輩はこれをやったのか、それは現地のの人にとってどんな意味があるのか。誰かの試行錯誤のプロセスは、今から活動しようというあなた自身が現地理解を深める上で一聴の価値があります。一体験談として先輩の話に耳を傾けてみませんか。

そして、一緒に活動していたカウンターパートや同僚、現地の人にも話を聞いてみる。成功話も失敗談も、現地で仕事を進める上での留意点や工夫を知ることができそうです。その上で、先輩が行った活動はその人の経験と専門、感性な

どを生かして行ったことなので、それにとられ過ぎずになたなりに周囲との信頼関係を築くことに注力するうちに、隊員間の人間関係はそれほど気にならなくなるように思います。むしろ、違うことに目を向けたら、自分もそれぞれ苦労したね、と話せるようになるかもしれません。

実は私の場合は相談者さんとは逆で、先輩隊員の側でした。インドネシアの村の総合開発

に取り組むため、複数の職種の人何代にもわたって派遣されるプロジェクトで、初代村落開発普及員（現在のコミュニティ開発）として村に水道を引く活動を行いました。今思えば、いろいろな活動の可能性がある現場でしたが、結果的に2代目以降の後輩隊員も、水道を引く活動を継続してくれました。この活動自体が失敗だったわけではありませんが、「目に見えて後に残るもの」という思いや焦りの中で、水道敷設を初代が始めてしまったばかりに、後の人たちがそれを続けざるを得なかったのでは」と初代の責任について考えることがありません。

地域に入っていく協力隊員は帰国して数年たっても、現地の人顔や名前を覚えてくれます。地元の人それぞれの隊員の違いを懐かしく語ってくれる未来を想像して、あなたらしく現地の毎日を充実させていくってください。

生徒たちに 数学の楽しさを伝える



さ はら ひかる
佐原 光さん
ガーナ/2016年度4次隊・千葉県出身

PROFILE
大学院卒業後、学芸員として科学館に勤務し、協力隊に参加。帰国後は石川県や北海道のフリースクールでも教える。現在は、「どんな境遇の子にも教育の機会を」をモットーに、オンラインのフリースクールにて、不登校の子どもたちにプログラミングを教えるほか、学習の相談を受けるメンターとして活動している。

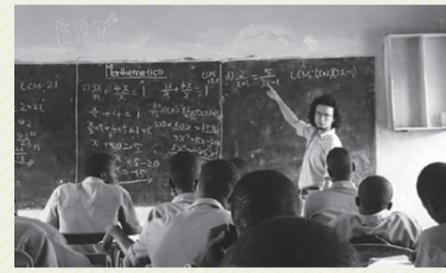
配属先: セント・パジラス技術学院
要請内容: ガーナ北西部の村落部に所在する技術・職業訓練校にて、現地教員と協力し、生徒たちに数学の授業を行う。また、同僚教員に対して知識・技術向上のためのアドバイスや支援を行う。

最大のピンチ

生徒が校則違反をすると厳しく罰せられていたのには戸惑いました。授業中にスマートフォンを使ってはいけないのに、使ってしまった生徒がいると、その生徒のスマートフォンを使えなくしたりするなど、生徒指導の厳しさには驚きました。一方で、教員のなかには、授業に遅れて来たり、時間にルーズな人もいましたが、そうした教員の意識を変えるところまでには至らず、自分の力だけではどうにもならないことに胸が痛みました。

最高のやりがい

派遣先の学校は全寮制で、私も同じ敷地内に住んでいたの、休みの日も生徒たちと遊ぶなど交流を深めることができました。PCインストラクターの同期隊員もいたので、連携を取りながらさまざまな活動ができたのもよかったです。生徒たちの楽しそうな表情を目にするとこの上ないやりがいや幸せを感じることができました。数学クラブも情熱のある同僚が引き継いでくれ、自分の思いが伝わったと嬉しく思っています。



配属先の職業訓練校で数学の授業を行う佐原さん

赴任

序盤

中盤

帰国

この職種の先輩隊員に注目！ 現場で見つけた 仕事図鑑

#0023

「数学教育」

分類：人的資源
派遣中：15人(累計：146人)
類似職種：小学校教育、理科教育、PCインストラクターなど

※人数は2023年6月末現在

CASE 1
**得意な理数系の知識を生かして
学ぶ楽しさを生徒たちに伝えた**
佐原光さんの派遣先は、ガーナの首都アクラからバスで14時間以上かかるアッパーウエスト州にある職業訓練校。生徒たちは中学校卒業相当だが、クラスによって学力差があり、小学校で習う算数が身につけていない生徒がいたり、1クラスに60人も生徒がいるクラスもあったため、できるだけ個別に見てあげられるように気を配った。

数学教育は、小学校(高学年)、中学校、高等学校、教員養成校などで、現地教員と共に数学を教える。身の回りにある資材を活用した教材なども用いてわかりやすい授業を行い、生徒が主体的に学習できるように支援する。可能な範囲で課外授業を実施するなど、生徒の興味を引き出す工夫も求められる。

また、現地教員と共に授業研究や研修会を行い、授業改善のための助言や指導も行う。

ほかに数学や理科のクラブ活動も活発に行い、科学の実験や計算力をつける魔方陣などを実施、楽しみながら学ぶ機会を設けた。

ガーナは教育系の隊員が多く理数科分科会があったので、お互いの任地を回り、生徒たちが楽しめるようなワークショップも実現できた。

学校の長期休み中には子ども向けのキャラバンツアーを実施したが、前職の科学館勤務の経験が役に立った。例えば多面体のパズルを作ったり、パソコンを使って数列の問題を視覚化したり、普段はできないような科学実験に子どもたちは目を輝かせて取り組んだ。現地の教員たちにそうした教材を教えたところ、実際に授業で使ったり、生徒たちが楽しく学ぶ様子に効果を感じてくれたことも大きな収穫となった。

CASE 2
**活動地域で研修会を開催して
数学教育の質の改善を図った**
伊藤遼さんが派遣されたのはホンジュラスの首都からバスで2時間ほどのラパス県。新規派遣で手探り状態だったため、最初の1年間はとにかく周囲とのコミュニケーションを大切に、活動拠点

では数学という枠にとらわれず、教育者として、自分の体験を子どもたちに伝え、いづれ自分の思いを受け継いだ若い世代が教育に携わってくれることを願っている。

学ぶべき単元に対して授業数が少ないと感じたため、教科書から問題を精選して、理解できる順番に並べて小テストを作成した。また、数字を書いたカードをめくってその和が10になるようにする、といったゲーム性の高いアクティビティを授業に取り入れて生徒が興味を持てるように工夫した。全寮制の学校だったので夜の自習時間には補習の

校であるラモンロサ小中一貫校だけでなく他校の視察も行い周辺校を含めて現場の課題を探った。その結果、地域の数学教員との関係を築くことができ、他県の数学協議会で研修会を開く機会にも恵まれ、教授法や数学を教えた。

現場では数学と母国語であるスペイン語をとて重視しており、数学ができない子どもは将来に負の影響を与えてしまう傾向がある。しかし農村部などでは、分数計算もままならないのに、教員不足のため教員免許がなくても教員に慣れてしまう現状も知った。

そこで、まずは教員の数学教育の質の向上を図ろうと、県の教育事務所と連携し、ラパス県でも研修会を開いてもらうように働きかけた。活動拠点校で実際に授業を行い、県内の教員に見てもらおうにしたところ、参加者は100人余りになった。純粋に数学を教えてほしいとの声を受けての指導はもちろん、皆で座標黒板を作って、それぞれの学校に持ち帰れるようにもした。板書計画なども丁寧に伝えた。

最高のやりがい

カウンターパートがとても優秀だったので、彼女に自分の知識をすべて伝え、それを実践して、教師として活躍してもらおうことを第一に考えていました。帰国の少し前のタイミングで改訂された教科書が配布されることになり、ラパス県をはじめ複数の県の代表として、彼女が新教科書を使ったデモンストレーション授業をやる機会を得たときは、胸に迫るものがありました。今後は彼女が質の高い教育を成し遂げてくれるに違いないと確信しています。



活動拠点校の生徒たちと伊藤さん(前列右から3人目)

最大のピンチ

半年ほどたった頃、カウンターパートに信頼されていないと思い込み、人間関係に疲れて1週間くらい学校に行けなくなってしまいました。任地でクーデターが起きて戒厳令が敷かれた状況も重なり、誰にも相談せず部屋の中で一人思い悩みましたが、せっかくここまで来たのだからと奮起。はっきり「ノー」と言うなど意思表示することで周囲とも信頼関係や絆が生まれ、単なる自分の取り越し苦労だったのだと気づくことができました。

赴任

序盤

終盤

帰国

研修を通じて 教員の質向上を図る



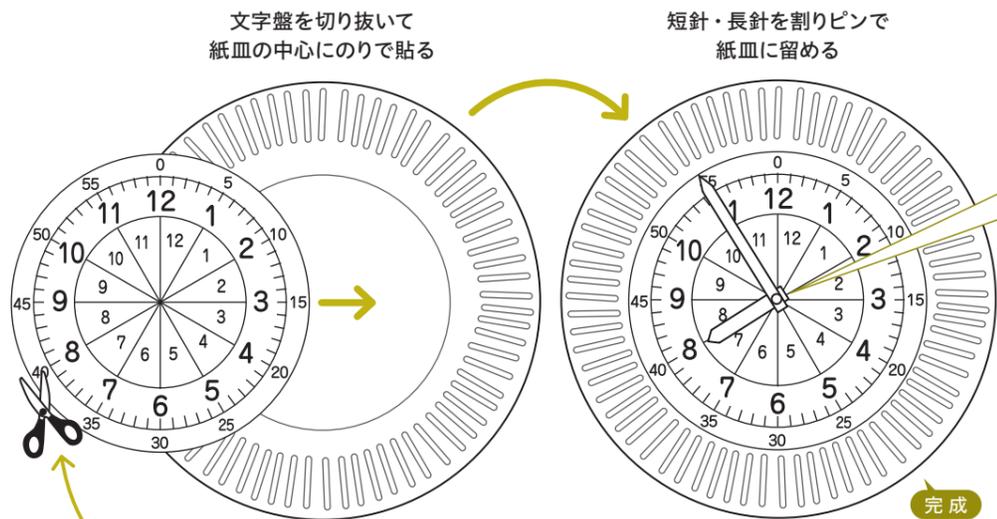
いとうりょう
伊藤 遼さん
ホンジュラス/2017年度1次隊・東京都出身

PROFILE
高校時代、尊敬できる先生と出会い数学の教師を志す。北海道教育大学在学中にJICE(日本国際協力センター)のプログラムを経験し、途上国や協力隊に関心を持つ。大学卒業後、新卒で協力隊に参加。帰国後は私立高校で数学教諭として3年間勤務。今後はさらに国際教育に対する見聞を広めるためイギリスの大学院に進学予定。

配属先: ラパス県教育事務所
要請内容: ホンジュラス中西部の県教育事務所を拠点とし、ラモンロサ小中一貫校において、効果的な数学授業の実施に向けた協力を行う。また、現地教員の研修会などを通じて、効果的な指導法の普及や、数学教育の質の向上に寄与する。

※ タレアディアリア…ホンジュラスの学校では復習の習慣がなかったため、教育系隊員が協力して前回の授業の復習ができる副教材を作成し教員に使うようにした。本来は、「タレア」は「宿題」、「ディアリア」は「日々の」という意味。

ステップ2：作り方



ハサミを使う時は刃を人に向けないこと、円や曲線を切る時はハサミだけでなく紙のほうも動かすと切りやすいことも伝えました。

使い方：授業では、子どもたちが数人のグループに分かれ、1グループに1つの紙製時計を渡します。先生が「何時何分を表して」と問題を出し、子どもたちは時計の針を動かして答えます。先生は大きな時計で答えの見本を見せます。

割りピンの使い方

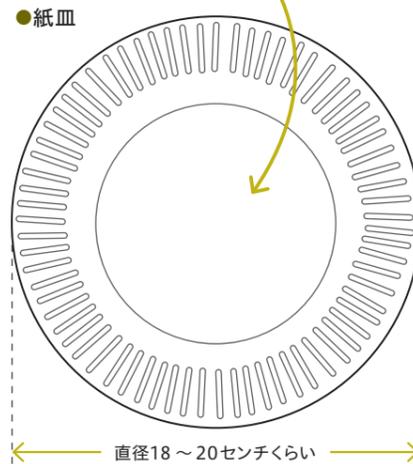
紙皿、短針・長針に画びょうなどで穴を開け、ペン先などで少し広げます。



端でけがをしないようにセロハンテープでカバーします。

ステップ1：材料をそろえる

円を切り抜くことに慣れていない先生も多いので、そうした作業が少なく済むように、紙皿をベースにします。



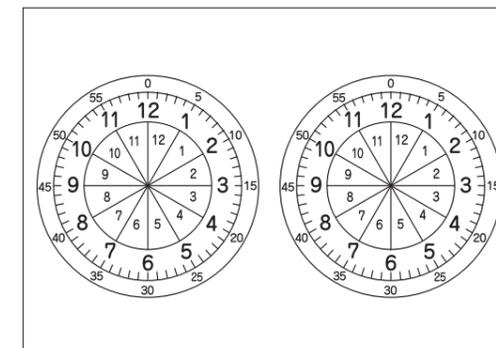
- 紙皿
 - 割りピン
 - 短針と長針
- 短針と長針はなるべく厚くて丈夫な紙を切り抜いて作ります。

生徒が使う紙製の時計の作り方



「時計」の授業で子どもたちに使ってもらった紙製の時計の模型をつくりました。私の配属先の小学校の場合は、1クラスを8グループに分けて模型を1つずつ配ったので、8個つくりました。

●時計の文字盤のプリント



時計の文字盤はインターネットからダウンロードしたものを縮小して印刷し、ハサミで丸く切り抜きます。下記のサイトのものは60%縮小で直径11.5センチほどになり、もう1枚印刷して並べるとA4サイズの用紙に2つ入ります。

文字盤がダウンロードできるサイトの例：『ちびむすドリル 幼児の学習素材館』
<https://happyilac.net/tokei-moziban.html>

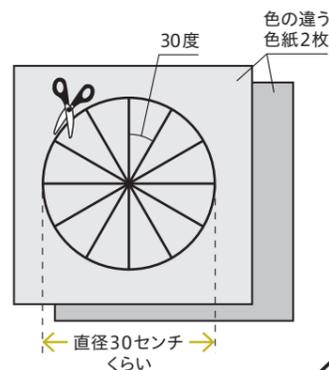
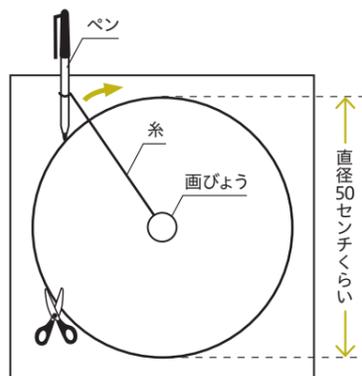
先生が使う大きな時計の作り方

時計の問題の答えは、黒板に描いたり消したりするよりも、先生用に大きな時計を作っておくと便利です。

材料：なるべく大きな円がとれる厚紙（理想は直径50センチくらい）、色違いの色紙2枚（直径30センチくらいの円が描けるサイズ）、短針・長針を切り抜くための厚紙、割りピン、大きな円を描くための糸と画びょう、ペン

ステップ1

用意した厚紙に大きな円を描きます。糸の両端にそれぞれ小さな輪を作り、厚紙の中心に画びょうなどで片方を留め、もう片方の輪にペンを通して、ぐるっと回して描きます。円が描けたらハサミで切り抜きます。

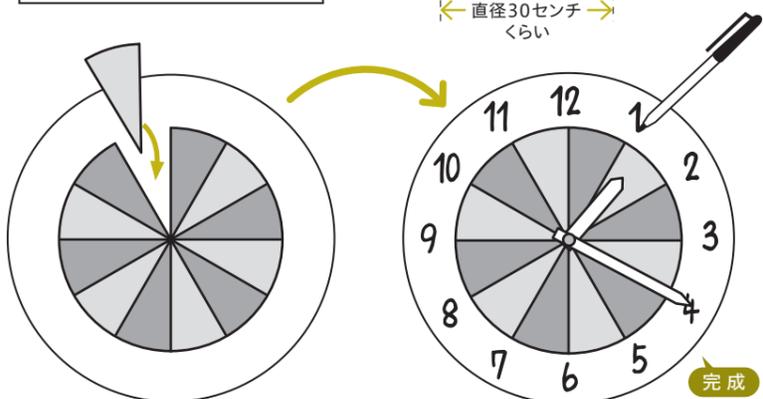


ステップ2

色違いの2枚の色紙に直径30センチくらいの円を描き、その円を分度器を使って30度ずつの円弧に分割し、ハサミで12等分に切ります。

ステップ3

厚紙のベースにステップ2で作った円弧を色が互い違いになるように、ぴったり並ぶようにのりで貼っていきます。



ステップ4

各時間を書き込んでいきます。短針・長針は生徒用の時計と同じように取り付けます。



今月の先生
ささきあやか
佐々木綾香さん

（ジブチ/小学校教員/2019年度1次隊、2022年度9次隊・北海道出身）大学を卒業後、北海道で小学校教諭として10年間勤務した後、2019年に現職教員特別派遣制度を利用して協力隊に参加。新型コロナウイルス感染拡大による一斉帰国を経て、22年に再派遣。23年3月に帰国後、復職。



先生が手作りした紙製の時計を使って授業を受ける生徒

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり & アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

「時間」の授業は紙製の模型を使って楽しく理解しやすく

ジブチの初等・中等教員養成校とその附属小学校で活動した佐々木綾香さんは、算数教材を使った授業を提案しました。算数で学ぶ「時計」は60進法を理解することなど、子どもたちにとっては難しい単元。日本では市販の時計の模型教材で理解してもらいますが、現地では模型が手に入りません。そこで先生に向けて「紙製の時計の作り方」を指導しました。

この時、ハサミや定規、分度器など文具の使い方に慣れていない現地の先生が多いことに気づき、使い方からレクチャーしました。

「最初は私のことを『教材を作る人』と認識していたようで、自ら手を動かすことに乗り気でなかった先生方ですが、一緒にじっくりと何回も呼びかけ、教材の学習効果を認識してからは、積極的になってくれました。教材づくりには根気も大切ですね」

シュエカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

バレーボール隊員の 経験を通じて マーケティングの 重要性を実感



今月の先輩

株式会社博報堂DYスポーツマーケティング
青木侖奈さん Rena Aoki
モンゴル/バレーボール/
2014年度3次隊・福井県出身

就職先：
株式会社博報堂DYスポーツマーケティング

事業概要：スポーツ関連の商標・ロゴなどを活用した商品化・ライセンス
リング、オリジナル商品の開発、プロモーショングッズの制
作、アスリートのマネジメント・キャストイング、エージェン
ト事業、イベントプロデュースなど。

青木侖奈さんの略歴：
1989年 福井県生まれ
2014年7月 大学院修了
2015年1月 青年海外協力隊員としてモンゴルに赴任
2017年1月 帰国
2017年3月 ナショナルチームのコーチとしてモンゴルに赴任
2017年6月 帰国
2017年7月 (株)博報堂DYスポーツマーケティング入社

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※カウンセラー/相談役により対応可能な日異なりますので、あらかじめ電話また
はメールでのご連絡をお願いします。



大学までバレーボールに熱中し、大
学院ではコーチング論を専攻。卒業後
は体育教師になることを考えていた青
木侖奈さん。協力隊への参加を決めた
のは、大学院時代にアナリストとして
帯同した全日本女子ユースチームの
コーチが元バレーボール隊員で、協力
隊を身近に感じたことがきっかけだっ
た。

「海外でいろいろな経験をしてから教
師になったほうが指導の幅が広がると
考えました」

モンゴルでの青木さんの活動は、配
属先である国立スポーツ学校での授業
だけでなく、依頼を受け
て、授業のない時間には高校の県選抜

1 協力隊時代 2015年1月～



中学生の体育では青木さん（前列右端）の地元の福井県から体育用具の
寄付を受けて授業で使用した

配属先は2009年に設立された国立のスポーツ学校で、小学1年生
から高校3年生まで約320人を対象に、一般教科と共にスポーツ
強化が目的のスポーツ専攻授業を行っています。学校での私の担
当は、体育授業のサポートと中学生のバレーボール専攻授業の指
導です。モンゴルではバレーボールの人気は比較的高く、大会も
頻繁に行われていました。しかし、授業は年間計画がなく不定期
な上、生徒数が少ないと休講になることも少なくありませんで
した。そんな時、カウンターパートの恩師で他校の教員をしている
方から声をかけられ、高校の県選抜チームの指導を手伝うこと
になりました。また、日本人が監督を務めていた縁で、モンゴルの
男子ナショナルチームの指導も手伝いました。

2 情報収集 2016年～

4年後に日本でオリンピックが開催されることから、オリンピッ
クに関わる仕事も視野に入れ、転職サイトで、「スポーツ」
「マーケティング」「オリンピック」などをキーワードに検索し、
求人情報を探しました。オリンピックを控えていたためスポーツ
分野の求人は多くありましたが、特定の競技や事業ではなく、ス
ポーツ全般を総合的に扱う会社に行きたいと考えていたため、条
件に合う会社は2社に絞られました。

3 書類提出 2016年10月

モンゴルからオンラインでプロフィールシートと志望動機を提出
しました。志望動機には、途上国でスポーツを指導する中で金銭
的な壁に突き当たったこと、それをきっかけにスポーツのマネジ
メント、マーケティングなどのノウハウを、実践を通じて学びた
いと書いたと記憶しています。年内に書類審査通過の連絡が来ま
した。会社にはこの段階で、3月にモンゴルに再渡航する予定で
あることを伝えました。

4 面接 2017年2月

1月に帰国してから、部長クラスによる1次面接、役員クラスによ
る2次面接がありました。自己PRでは、フィジカルとメンタルの
強さをアピールしました。その際、お風呂やシャワーがないモン
ゴルでの生活や、要請内容にない学校以外での指導を行うため
に、配属先の校長先生とどのように交渉したかなど、協力隊での
エピソードも話しました。

5 モンゴルに再渡航 2017年3月

5月にモンゴルで開かれる東アジア選手権に向け、ナショナル
チーム強化のためのコーチとして参加しました。

2017年7月 入社

チーム、男子ナショナルチームの指導
も行った。そして、働きながらナシ
ョナルチームで競技をする選手たちと出
会ったことは、その後の青木さんの進
路にも大きな影響を与えた。

「選手たちは大会の1カ月前から集
まって全体練習をしますが、その間は
仕事ができないため給料をもらえませ
ん。電気代も払えなくなり、競技を諦
める選手もいます。それが私には衝撃
的でした。競技を強化するにはコーチ
ング論だけでなく、選手を経済的にサ
ポートするシステムが必要でした」

そう考えた青木さんは、帰国後にス
ポーツマネジメントやマーケティング
を学べる仕事に就くことに決め、転職
サイトで求人情報を探し始めた。気にな
る会社を見つけると、モンゴルから
エントリーシートを提出した。協力隊
の任期終了後、4カ月はナショナル
チームのコーチとしてモンゴルに再渡
航することを決めていたので、就職活
動ではそのことも伝えた。

現在、世界で活躍するバレーボール
のトップ選手のマネジメントも担当し
ている青木さん。

「途上国ではトップ選手の試合を間近
で見られる機会はありません。次世代
の子どもたちがスポーツに夢を持てる
ように、将来的にそんな企画も立ち上
げられたら」と夢は膨らむ。

現在の仕事

入社直後はイベントプロデュースの部署に所属し、陸上、バ
ドミントン、インターハイ、野球の国際大会などに携わりま
した。2020年4月からはアスリートプロデュース本部に所
属しています。業務は主に二つ。一つは企業が広告にアス
リートを起用したいと考えた時に、企業とアスリートをつ
なぐキャストイング。もう一つはスポーツ選手のスケジュール
や肖像権などを管理するマネジメントです。作品が世に
出た時の反響の大きさにやりがいを感じています。



青木さんが担当している男子バレーボールの石川祐希選手が所属する
イタリア・ミラノのクラブの体育館にて（今年2月）

後輩へメッセージ

自分がやりたいことを大切にしてください。私自身は中学
の頃からスポーツに関わってきて、スポーツに関係する仕
事したいとずっと思ってきました。学生時代に思っていた
体育教師とは形は変わりましたが、その信念は変わらず
にきました。それを貫いたことが今の仕事につながって
いると思っています。やりたいことに通じるルート、手法は
いろいろあるので、やりたいことを諦めずに突き進んでほし
いと思います。

岩村さんの歩み

1979年、神奈川県茅ヶ崎市生まれ。



子どもの頃から海外に興味があり、テレビのドキュメンタリー番組や世界地図を見るのが好きでした。高校1年生の時に米国でホームステイした先がベトナム人移民の家庭で、多様性を感じ、刺激的な経験でした。

2002年、新卒で協力隊に参加。



学生時代にバックパッカー旅行をして、いろいろな国の人とワイワイ話すことの楽しさを覚えたのが、協力隊に魅かれたきっかけかもしれません。

2008年、エルサルバドルの日本大使館で草の根・人間の安全保障無償資金協力外部委嘱員として1年間勤務。

2010年、結婚。



夫は日本の企業に勤めている日本人です。結婚してからの13年間、私は半分以上を海外で単身赴任していますが、年に4回はどちらかの長期休暇を利用して1~3週間ぐらいい緒に過ごしています。理想的な結婚生活です(笑)。

2011年、在日メキシコ大使館の商務部で働き始める。

2014年、日本メキシコ学院(リセオ)に転職。

2017年、ロータリー財団奨学生としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校の大学院で多文化教育を学ぶ。



英語が得意ではなく、欧米人にコンプレックスがあったのが正直なところですが、留学先で対等にディベートできたので自信ができました。

2019年、文化交流企画局長としてリセオに再就職。2022年からは学院長代理。



現場が好きなので、オフィスにこもらずに学校中を巡回して、生徒や先生たちとは必ず挨拶しています。好きな仕事ばかりができるわけではありませんが、何事にも楽しみや面白さを見いだすことが大切だと思っています。



①活動序盤ではパラグアイなまりのスペイン語に苦労した岩村さん。当時出会った女の子たちとは、20年後の今でも連絡を取り合っている
②文化交流企画局のスタッフや理事たちと岩村さん
③リセオでは文化祭や運動会を実施するなど、日本とメキシコの児童・生徒が交流する機会を設けており、現在は日本コースに130人、メキシココースに1000人余りが籍を置いている



派遣から始まる未来



進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

メキシコの日本人学校で学院長代理として勤務

岩村華子(旧姓:大野)さん Hanako Iwamura
パラグアイ/青少年活動/2002年度1次隊・神奈川県出身

多文化共生を掲げる日本人学校の理想と現実 学院長代理に抜擢されて改革中

通常、日本人学校は日本人の子弟を本国のカリキュラムの下で育てることが目的で、現地の生徒を受け入れることは少ない。しかし、メキシコシティにある日本メキシコ学院(以下、リセオ※)は、日本人向けの日本コースのほか、メキシコ人に日本文化を含めた教育を行うメキシココースを併設する珍しい学校だ。各コースで幼稚園から高校部まで(日本コースは小・中学部まで)一貫教育を行い、1977年の設立当時から「教育と文化交流活動を通じて、メキシコと日本という二つの貴い文化の連帯と協調、理解の懸け橋となる」を理念に掲げる。

そんなリセオで学務と事務を束ねるのが、学院長代理の岩村華子さん。岩村さんが目指すのは、さまざまな民族的・文化的背景を持つ子どもたちが自立的に相互理解を深めることである。

岩村さんが中南米に初めて滞在したのは21年前。隊員として赴任したパラグアイの村落で住民グループに加わり、学校からドロップアウトした青少年のための社会活動を行った。

英語や日本語講座などの職業訓練、性教育、子どもたちの居場所となる広場作り……。子ども自身が考えて行動できる仕組みを整えようと、できることは何でもやった。だが、2年間の活動に心残りもあつた。「私は国際協力だと言って草の根的に現地へ入って楽しく活動しましたが、貧しい子どもたちの将

てくれていた理事長から文化交流企画局の局長として戻るよう打診された。「一度はお断りしたのですが、『以前できなかったことも、局長になればできるかも』と説得されました」

心に引っかかっていたやり残しをくみ取ってもらえたように思い、リセオに再就職したのが19年。メキシココースの日本語教育では日本コースの生徒との交流授業を増やすなどインプット型からアウトプット型に転換したり、日本の学校とのオンライン交流を毎月実施したりと、実際に日本語を使う機会を増やした。「メキシココースの高校部3年生は例年約60人が在籍していますが、以前は日本の大学への進学者は学年に1人いるかないかでした。私は上智大学などと協定締結にこぎ着け、今は毎年1割ほどが日本の大学に

来に貢献できたか疑問で、私が去った後は何も残らないとも感じました」。

その後は日本企業を経て、エルサルバドルの日本大使館で無償資金協力の外部委嘱員として1年間働いたが、援助で造られた施設が維持されていない状況を目の当たりに。一連の経験の中で、貧しい人々への直接支援ではなく、特に中間層の児童への教育の質を上げ、社会制度を変える人材を育てることが、貧富の差の解消につながるの考えに至った。そして再び帰国し、語学力を生かして東京の在日メキシコ大使館で働いていた時、リセオのことを知った。

「同僚にリセオの卒業生がいたのですが、メキシコ人なのに俳句が好きだったり茶道のたしなみがあつたりして、その学校、面白い!と思いました」

リセオの文化交流企画局の求人を知った岩村さんは2014年にメキシコへ渡る。「企画局の役目は両コースの交流促進で、交流イベントや同窓会、インターンシップなど、異文化交流の中で子どもたちが学びを深められるような企画をどんどん出しました」。

2年半ほど前のめりに働いた岩村さんだったが、「一職員としての裁量の限界から、まだ交流を本格的に増やせる状況ではないと感じていました」。リセオを辞めて一度帰国し、1年間米国の大学院へ留学。東京で働いていたところ、リセオで岩村さんに目をかけ

進学しています」。

学院長のポストが空いたことから代理も兼ねるようになった現在、学院全体の業務にも追われる岩村さんだが、目標はあくまでも明確で変わらない。

「まだ大人が交流授業などを企画せざるを得ませんが、本来は校舎もカリキュラムもできる限り一体化し、両国の生徒たちが自発的な交流の中で人間性を育むことが理想です。日本コースの生徒たちも、せっかく外国にいて日本人の仲間内だけで行動するのはもったいないですし、交流する中で意見をぶつけ合い、ケンカするのも大事だと思います」

地道な改革でリセオを理想の姿に近づけながら、「リセオモデル」を他の教育現場にも広げていきたい……。岩村さんの挑戦は続いている。

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

2023年春募集の説明会参加者数と応募者数

JICA海外協力隊の2023年春募集(長期派遣)が7月3日に終了しました。説明会は、対面式説明会とオンライン説明会のハイブリッドで行われ、説明会参加者数は、対面式説明会がのべ2029人、オンライン説明会がのべ781人でした。応募者数は、青年海外協力隊・海外協力隊と日系社会青年海外協力隊・日系社会海外協力隊が1134人(昨年春募集は1315人)、シニア海外協力隊と日系社会シニア海外協力隊が83人(昨年春募集は121人)でした。今後は8月中旬に1次選考の結果が発表され、9月中旬に2次選考、10月末に最終的な合否決定が行われる予定です。

AWARD

協力隊OVの小林義文さんが「Leadership In Rehabilitation award」を受賞

6月3日、アラブ首長国連邦のドバイ世界貿易センターで開催されたWorld Physiotherapy(世界理学療法連盟)の学会にて、協力隊OVの小林義文さん(マレーシア/理学療法士/1983年度3次隊)が「Leadership In Rehabilitation award」を日本人として初めて受賞されました。小林さんは、長年総合病院などのリハビリテーション部門で働きながら、JICAやNPOなどと協働し、アジア・中近東の障害のある人々へのリハビリテーション支援を行ってきました。また出身地である福井県の難病患者の療養支援を地元ボランティアと共に長年継続しており、現在は福井県医療福祉専門学校で講師として後進の指導・育成にも尽力されています。

World Physiotherapy awards recipients 2023
<https://world.physio/team/world-physiotherapy-awards-recipients-2023>

WEB MEDIA

「Sports for Social」サイトで協力隊スポーツ隊員を連載

JICA海外協力隊は、これまでに約5,000人近くのスポーツ隊員を派遣し、世界各国でスポーツの技術を教え、その国の文化を共に創ってきました。「Sports for Social」サイトではスポーツ隊員にスポットを当て、海外で活躍した、もしくは現在も活躍している隊員の“想い”を取り上げます。第1回は、JICA職員として、数多くのスポーツ隊員を支えてきた青年海外協力隊事務局専任参事 勝又 晋さんと若井郁子さん(モルディブ/バドミントン/1996年度3次隊)、第2回は現役水泳隊員の福山 傑さん(ヨルダン/2021年度2次隊)、津國愛佳さん(インドネシア/2022年度7次隊)、川口 礼さん(エルサルバドル/2022年度7次隊)の3名です。第3回は女子サッカーのOVを取り上げます。今後も順次配信されますので、ぜひご覧ください。



第1回の記事に登場する、勝又 晋青年海外協力隊事務局専任参事(左)と、バドミントン職種OVの若井郁子さん



JICA X Sports for Social 第1回
<https://sports-for-social.com/special/jica-sports-01/>



JICA X Sports for Social 第2回
<https://sports-for-social.com/special/jica-sports-02/>

クロスロード [2023年8月号]

第59巻第7号 通巻689号
 発行日 2023(令和5)年8月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
 青年海外協力隊事務局
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会「クロスロード」編集室
 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
 ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
 印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



編集後記

JICA事務局：表紙の水泳隊員の福山 傑さんは、7月に福岡で開催された世界水泳に、ヨルダンチームの一員として参加されました。派遣国の代表チームの一員として活躍したスポーツ隊員やOVは多くいます。協力隊の関わる国々の応援もしていきたいですね。(脇田雄気)

クロスロード編集室：社会還元表彰大賞を受賞された徳島 泰さん。3Dプリント義足を開発した企業の経営者としてさまざまな媒体で取材されていますが、P4-5の記事では転機となった協力隊時代のエピソードもお話いただきました。必見です！(干川美奈子)

JICA 海外協力隊派遣現況

(2023年6月末現在)

現在の派遣国数
67カ国



(単位：人)

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	25	1
ガーナ	31	
ガボン	9	1
カメルーン	20	
ケニア	31	
ザンビア	7	
ジブチ	7	
ジンバブエ	10	
セネガル	11	
タンザニア	4	
ナミビア	7	
ベナン	11	
ボツワナ	16	1
マダガスカル	29	
マラウイ	17	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	23	1
ルワンダ	40	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	13	
インドネシア	8	1
ウズベキスタン	9	2
カンボジア	24	
キルギス	9	
ジョージア	4	
スリランカ	9	
タイ	17	3
東ティモール	9	
フィリピン	5	
ブータン	21	6
ベトナム	36	
マレーシア	15	6
モンゴル	14	1
ラオス	14	3

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
サモア	1	
ソロモン	6	
トンガ	3	1
バヌアツ	3	
パラオ	16	3
フィジー	8	1
マーシャル	2	
ミクロネシア	2	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	7	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	24	
チュニジア	15	1
モロッコ	5	
ヨルダン	24	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン	2	1		1
ウルグアイ	4			
エクアドル	9			
エルサルバドル	12			
キューバ		3		
グアテマラ	22	1		
コスタリカ	13			
コロンビア	5	2		
ジャマイカ	5	1		
セントルシア	10			
チリ	8	1		
ドミニカ共和国	13		8	
ニカラグア	9	2		
パナマ	4			
パラグアイ	26	3	3	
ブラジル				28
ペルー	3			
ベネズエラ	20	2		
ボリビア	20	2	1	
ホンジュラス	11			
メキシコ	4	4		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	819 (344/475)	65 (53/12)	41 (14/27)	2 (1/1)	927 (412/515)
累計 (男性/女性)	46,769 (24,720/22,049)	6,633 (5,358/1,275)	1,586 (612/974)	550 (254/296)	55,538 (30,944/24,594)



今月の料理

モロッコ北部のストリートフード
モロッコサンドイッチ
(じゃがたまクミンサンド)



●材料(フランスパン1本分)

- じゃがいも…………… 小さめ3個
- 卵…………… 3個
(じゃがいもと卵が均等量)
- フランスパン…………… 1本
- 塩…………… 大きじ2程度
- クミン…………… 小さじ1程度
- ローリエ…………… 2~3枚
- オリーブオイル…………… 適量

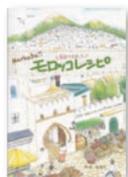
●レシピ

- ①大きめの鍋に皮つきのじゃがいも、塩、ローリエとたっぷりの水を入れ、鍋を火にかける
- ②①の鍋のお湯が沸騰してきたら中火にする。鍋に卵を追加して入れ、12分程度ゆでてゆで卵を作り、出来上がった卵を取り出し、殻をむく。じゃがいもは時々串やフォークなどを刺して、中心まで火が通るまでゆでる
- ③お湯を捨てた鍋の中でじゃがいもをフォークで4等分くらいにしながらか皮をむく。卵も鍋に入れてフォークで

- 4等分くらいにして、クミン小さじ1/2強と塩を適量(ゆでる時に塩味が足りないので、味見をして足りなければ)加えて混ぜる
- ④フランスパンは1本を3~4等分くらいにカットし、それぞれ脇から二つに切る
- ⑤二つに切ったフランスパンの内側にそれぞれオリーブオイルを染み込ませ、③をたっぷり挟んで完成。この時、具材にクミンを1つまみ振りかけると、香りがさらに増す

<アドバイス>

私の任地・テトゥアンやタンジェの道端の屋台で見かけるフランスパンのサンドイッチを紹介します。クミンと少し上等なオリーブオイルを使うことで、一気にモロッコの味に。現地ではジャガイモと卵の鍋は別々でしたが、自炊しやすいよう、お鍋一つでできるレシピにしました。具材が温かいとクミンの香りがより広がるので、手早くサンドして食べてみてください。



\\ CHECK /

桂さんが任地で家庭訪問をした際、生徒の母親から教わった料理をレシピ集にした『Marhaba!!家庭で出会ったモロッコレシピ 1102日暮らして見つけた15の思い出料理帳』では、代表的なモロッコ料理やお菓子を手書きイラストで紹介しています。

\\ 教える人 /

かつらまさよ
桂聖代(旧姓・露口)さん

モロッコ/料理/
2015年度2次隊・三重県出身

栄養士、調理師、製菓衛生師。隊員時代は、テトゥアンのタブラ社会自立促進センターの料理コースで、学業中退や経済的に困難な状況にある15~30歳の男女を対象にした生徒たちに料理を教えた。



あの日、
地球の、
あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

伝統文化でいっぱい
の
バナアツ生活

私が派遣されたバナアツのエスピリットサント島は国内の島々で2番目に人口が多く、主要な島の一つでした。とはいえ電気や水道の普及していない村もまだ多く残っていて、現地の人々との暮らしで特に印象的だったのは、伝統的な慣習や、魔術・精霊のような超自然的な世界観が日常に根差していることでした。

例えば、村ごとにカスタムダンスという固有の踊りがあり、皆でそれを踊り、カヴァ(※)を飲むことが神聖な儀式とされています。そして、どの村の広場にも木が植えられていて、その下



Illustration = 牧野良幸 Text = 飯淵一樹(本誌)

※カヴァ…メラネシアからポリネシアにかけて分布するコシヨウ科の植物および、その根を粉砕・水漬(こ)して作る飲み物のこと。鎮静作用があり、儀礼用のほか日常の嗜好品としても飲まれる。

のナカマル(集会場所)でカヴァを飲みながら、木に触れたり語りかけたりすることで、精霊とつながれると考えられているようです。私は初めてカヴァを飲んだ時、緊張のためか何の作用も起きず、一緒にいた同僚から「おまえはまだカヴァに心を開いていないんだ」と言われたことも。

黒魔術もく身近な概念で、家の前に小さな石の塔が積まれていると呪いを受けた印なのだと言いますし、町を歩いていて、呪いをほらう折禱師の看板を見かけたりもしました。

火事や病気などの不幸があった時、黒魔術のせいだと考えるのも一般的です。ある日、活動で魚の養殖事業者を訪ねると、池の魚が急に全滅したと聞きました。業者の人が言うには、「経営が順調なので、ねたんだ者に黒魔術で呪われた」とのこと。ただ、詳しく話を聞くと、池の許容量の倍もの魚を飼っていたことによる酸欠らしいと判明。私の説明にどこまで納得してくれたかわかりませんが、一応安心といふことで収まる一幕もありました。

射庭盛敏さん

バナアツ/コミュニティ開発/
2014年度4次隊、ラオス/養殖/
2018年度2次隊・東京都出身

暮らしている市、町、村



ビドン近郊を流れるメルボック川の夕景



ビドンは自然が豊かな地方の町です。個人商店が多く、こまごました日用品は大体買えるのですが、現地ではトイレを手と水だけで済ませる習慣があるのでトイレトーパーを置いている店が少ないです。そのため、時には車で30分ほどの中核都市のショッピングモールまで買い物に出たりもします。

公開！ 私の派遣国生活



[マレーシア]

たなかけんし
田中健志さん

(障害児・者支援/2021年度7次隊・大阪府出身)

活動の様子



国内北部のクダ州を管轄する社会福祉局に配属され、ビドンという町のPKS(障害者ワンストップセンター)で活動しています。主な業務は障害者の就労支援や就労後のジョブコーチによる伴走支援で、私は同僚たちと連携しながら相談の受けつけや仕事探しなどを行っています。



自宅からPKSまでは3kmほど。途中は人通りが少ないため、行き帰りは同僚や知人の車に乗せてもらったり、配車アプリを利用している

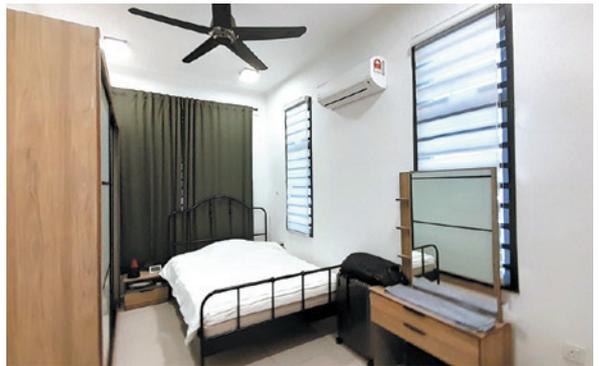
食べ物



①ナシレマ ②ロティチャナイ
ナシレマは安いものならば1リンギット(約30円)ほど、ロティチャナイはそれよりやや安く、ビドンでの飲食費は総じて首都クアラルンプールより4割ほど安い

ビドンの町には食堂がいくつもあるので、食事は大体そこで済ませています。同僚が主にマレー系の人なので一緒にマレー料理を食べに行くことが多く、ココナッツミルクで炊いたご飯に豆や干し魚を添えたナシレマや、薄い生地のパンをカレーにつけて食べるロティチャナイなどが好きですね。

住まい



公務員向けの戸建て住宅に住んでいて、空調や洗濯機、トイレ・シャワー(パスタブなし)などの設備は整っています。インフラも基本的に良好で、この1年ほどで2、3回停電があったり、たまに断水が起こったりする程度です。



トイレトーパーホルダーはなく、尻洗浄用のホースがついている

写真提供 = 田中健志さん Text = 飯淵一樹(本誌)